三重県埋蔵文化財調査報告 10

一志郡三雲村

中ノ庄遺跡発掘調査報告

1972

三重県教育委員会

序

一志郡三雲村は、沖積地にあって、古くから弥生時代遺跡の点在しているところとして知られている地域である。また、この地域は、三重県でも有数の穀倉地帯で、農業振興にとくに力を入れているところとしても知られている。

ここに、報告する一志郡三雲村・中ノ庄遺跡は、このたびの圃場整備事業のため、遺跡の一部が削りとられることになり、発掘調査を実施したものである。従って調査は、遺跡の一部分であったが、弥生時代前期土器及び馬形埴輪など、多数の貴重な考古資料を手にすることができた。

報告書を刊行するに当り、調査に協力いただいた県農林水産部及び地元の関係者各位に謝意を表するものである。

昭和47年3月

三重県教育委員会
教育長　関根則之

例　　言

1．本書は三重県教育委員会が行った一志郡三雲村中ノ庄字古城570～576、580～593番地所在の中ノ庄遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2．調査は次の体制で行った。

調 査 主 体	三重県教育委員会
調査費負担者	三重県農林水産部
調 査 担 当 者	小玉　道明（三重県教育委員会文化課）
	下村登良男（　　〃　　）
	谷本　鋭次（　　〃　　）

3．発掘調査後の遺物整理および報告書作成は谷本が行なった。

4．発掘調査にあたっては、日本土建株式会社、県耕地課、津耕地事務所の全面的協力を得た。

5．ＰＬ13の写真は津耕地事務所の提供による。

6．発掘作業には山田好一氏をはじめ地元中ノ庄部落の人々の協力を得た。

歴史時代の報告にあたっては三重県文化財専門委員森田利吉氏より多くの御教示を得た。記して謝意を表する。

7. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　　言……1

Ⅱ　位　　置……2

Ⅲ　遺　　構……3

1）弥生時代遺構……3

2）古墳時代遺構……5

3）歴史時代遺構……5

Ⅳ　遺　　物……5

1）弥生時代前期の土器……5

2）弥生時代中期の土器……8

3）弥生時代後期の土器……10

4）弥生時代の土製品・石器……10

5）古墳時代の遺物……11

6）歴史時代の遺物……15

Ⅴ　結　　語……17

図　版　目　次

ＰＬ１	中ノ庄遺跡位置図、発掘区
2	発掘区平面図
3	弥生時代前期土器実測図
4	弥生時代前期土器実測図
5	弥生時代前期土器実測図
6	弥生時代前期・中期土器実測図
7	弥生時代中期・後期土器実測図
8	弥生時代前期土器拓影
9	弥生時代前期・中期土器拓影
10	弥生時代土製品・石器実測図
11	古墳時代埴輪実測図
12	古墳時代・歴史時代土器・瓦塔実測図
13	遺跡遠景
14	遺跡遠景
15	発掘区
16	ＳＤ９・10・11、ＳＤ１
17	ＳＤ16、出土状態
18	弥生時代前期土器
19	弥生時代前期土器
20	弥生時代中期・古墳時代・歴史時代土器
21	古墳時代馬・人物・朝顔・円筒埴輪
22	弥生時代前期土器
23	弥生時代前期土器
24	弥生時代中期土器
25	古墳時代人物埴輪、その他、家形埴輪
26	弥生時代土製品・石器、歴史時代瓦塔

I　前　　言

一志郡三雲村中ノ庄遺跡は、三渡川の南側の水田に囲まれた微高地の畑に所在する。この遺跡は古くより知られていた遺跡であり、今までにも石鏃、弥生式土器片、灯明皿などが出土している。県遺跡地図（遺跡番号1794）では弥生時代の遺跡として、南北500ｍ、東西200ｍの約100,000㎡と記載されている。

昭和46年度当初、県耕地課より圃場整備事業施工地域内の埋蔵文化財についての照会があった。前年度の現地踏査の際には多数の灯明皿、土師器甕形土器、山茶椀片が採集され、中世村落址の可能性も考えられていた。８月、施工図面をもとに協議をもち、９月には現地での協議を行った。その結果、遺跡の大部分は、事業計画立案の際に現状のままで保存されることになった。しかし、遺跡の北端部6,000㎡の地域が、幹線排水路と畑寄せのために破壊をうけることが明らかになった。そのため工事着手前にまず試掘調査を実施し、その結果によって本調査実施の是否をきめることとなった。

そこで、事業者負担による試掘調査を９月27日付け文書で農林水産部長に依頼した。10月になって、農林水産部より調査費の執行委任をうけ、11月上旬に試掘調査を行うことになった。

試掘調査は４ｍ四方のグリッドを20ｍ間隔に17ヶ所設定して行った。その結果、弥生時代前期を主体とする遺跡であることが判明した。地山は白色の砂層で、その上面より多数の弥生式土器片が出土する。耕作土およびその下からは山茶椀片や土師器甕、鍋をはじめとして、瓦塔片も出土した。更に北寄りのグリッドからは円筒埴輪片も出土している。

試掘調査の結果を農林水産部に報告するとともに本調査の打ち合せを行った。本調査は試掘調査同様に調査費の執行委任をうけ、12月６日から１月10日まで行うことになった。

調査に先立ち、４米四方のグリッドを設定した。幹線水路を基本軸として、北より南に向ってアラビア数字を、西より東に向ってはアルファベットを与えた。幹線水路の部分（Ｋ列）より発掘をはじめる。（Ｋ，15～17）区にかけて室町時代の土師器甕、山茶椀が出土し、数条の溝が見付かる。順次東側へ向って発掘区を拡げる。（Ｌ～Ｍ,17）区に於いて見付かった東西に走る溝は僅かな弥生式土器片を出土したのみであったが、その両端部より直角に向う別の溝の一部が見付かり、方形周溝とも考えられるものであった。又（Ｋ，11）区からは火葬骨の入った壺形土器の下半部が出土した。（Ｍ～Ｎ，12）区では弥生時代中期の溝を検出。Ｏ列からは多数の埴輪片が出土し、東側につき出た畑では、Ｓ、Ｔ列からも多数の埴輪片が出土し、孤状に巡る溝であることが判明した。この溝の最下部からは弥生時代中期の土器片も出土している。更に東では僅か10

cm程度で地山となっていた。

調査期間中も周辺では圃場整備事業が行われており、地元の人々の多くはその作業に出ていたため、調査の作業員は不足しがちであった。また、期間中に新年を迎えるために、17列までで、一旦、写真撮影、測量を行った。そして18列以南については、ブルトーザーによって表土を除去し、一列おきに、トレンチ掘りを行うことにした。

47年に入り、18列より南に向って発掘を進める。方形周溝と思われたK、N列の溝は南と東側の溝は直角とならずに孤状となり、又、土器の出土もなく方形周溝とは断言できなかった。しかし、周溝内側からは大形壺形土器が比較的纏って出土した。この周溝の南方より新しい時代の井戸も数ヶ所検出した。大きな孤状を描く幅のせまい溝を検出したが、遺物の出土は少ない。ただ（P，25）区からは小形壺形土器の完形品が出土している。西側へ向うに従い地山が徐々に低くなっている。西側の部分に於いては18～23列では遺物は少なく、26～27列では表土下より瓦塔片が多数出土。しかし、遺構は検出出来なかった。その下層からは弥生式土器片が比較的多数出土し、微高地に並行して浅い溝が走っていた。

調査期限の１月10日を迎えても調査は終らず、圃場整備事業も工期の限られた事業であり、現場での話合いもたびたびもたれた。結局、10日間調査期間を延長して、１月20日に終了した。調査範囲は約3,000m²である。

II　位　　置

伊勢平野の中央部に開口する河川には鈴鹿山脈、紀伊山脈といった国境にその源を発する安濃川、雲出川、櫛田川といった大河川がほぼ10km間隔に見られる。その間には平野部につづく丘陵より流れる小河川が多く見られる。雲出川と櫛田川のほぼ中央部を流れる三渡川は雲出川の支流中村川と坂内川とに囲まれた丘陵の小河川を合流して伊勢湾に沿いでいる。即ち、丘陵裾の大阿坂、小阿坂、岩内といった小さな扇状地上の部落を流れる岩内川、堀坂川といった小河川を合流している。中ノ庄遺跡は三渡川の右岸沿いで、河口より２kmの個所で、三渡川より僅かに100m離れているのみである。幅200m、長さ500mの南北に細長い微高地で、現在畑地となっている。一部分は田に削られている個所もある。標高1.3～1.8ｍで、水田との比高僅か数10cmである。現在の中ノ庄部落も同様の微高地上に位置しており、地山は単純な砂層であり、表土は20～60cmである。

行政的には三雲村中ノ庄字古城に属する。

三渡川周辺の遺跡については、「一志郡史」下巻〔鈴木敏雄　1955〕にくわしく述べられている。しかし、中ノ庄遺跡については明確ではない。昭和36年の遺物包蔵地調査によれば、今回の

発掘地点および、中ノ庄部落の北側より土師器、弥生式土器片が採集されると記されている。地元の人の中には石器を多数所持している人もいる。

中ノ庄遺跡のある沖積地には、縄文時代の遺跡は全く見当らない。雲出川の北岸の丘陵上にある木造赤坂遺跡（１）、中村川左岸の丘陵端部に位置する鹿伏遺跡（２）があげられるのみである。鹿伏遺跡からは楕円押形文の破片が採集されている。

弥生時代になると著名な権現前遺跡（３）があげられる。前期末の遺跡で、標高15ｍの低い丘陵上に位置する。他に文珠遺跡（４）、宮ノ越遺跡（５）等があり、いずれも沖積地の中の微高地の畑である。一方、海岸部では権現角遺跡（６）、久米貝塚（７）、寺前貝塚（８）、猟師田遺跡（９）等がある。これらの遺跡より採集されている土器片はいずれも後期に属している。久米、寺前といった貝塚は小規模なものである。

古墳時代になると、当遺跡の西方に三基の前方後方墳がある。筒野古墳（10）、西山古墳（11）、向山古墳（12）である。全長それぞれ40、43.6、71.4ｍを測る。筒野古墳からは三角縁神獣鏡、石釧、向山古墳からは車輪石、重圏組帯文鏡等が出土している。向山につづく小野、阿坂の丘陵には後期の円墳群（13）が分布している。

歴史時代になると、天華廃寺址（14）、嬉野廃寺址（15）等奈良時代と思われる寺院址が、中村川左岸の丘陵上に位置している。一方当遺跡の南方1.5kmの個所は大行寺址（16）といわれ、平安時代以降の寺院址と考えられている。　〔（ ）内数字はＰＬ１の番号に相当する〕

Ⅲ　遺　　構

弥生時代土坑、溝、古墳時代周溝更に歴史時代の溝、井戸等が見付かっている。いずれも地山の砂層を掘りくぼめたものである。当遺跡の層位をみてみると、第Ⅰ層―耕作土、第Ⅱ層―黒褐色土層、第Ⅲ層―白色砂層（地山）となっている。このⅡ層目が遺物包含層である。北側では地山まで比較的浅く10～30cm、南側では深く40～60cmある。一方、西側では徐々に地山は深くなっている。瓦塔が多数出土した南西隅に於いては、Ⅱ層目の黒褐色土上面が比較的固く踏みかためられたような状態の部分もあったが、遺構は明瞭に出きなかった。

時期不詳の遺構を含めて、全てやゝ粒子の粗い白色砂層に於いて検出されている。試掘調査に於いては、各グリッドの水位が高く、排水の心配があった。本調査に先立ち、幹線排水路の工事の関係からも、遺跡の西側に水路を設けた。そのためか検出した遺構は全て水分の含まないもので、非常にくずれやすいものであった。（ＰＬ２）

１）弥生時代遺構

○土　　坑

土坑には径１ｍ前後の円形を呈するもの（ＳＫ４～７）と、方形を呈すると思われるもの（ＳＫ13)、楕円形を呈するもの（ＳＫ８・12・15）等がある。

ＳＫ５；（Ｎ，14）区に於いて検出。径1.6×1.4m、深さ40cmを測る。黒褐色土が充満しており、前期土器片が少量出土。

ＳＫ12；（Ｌ，19）区。1.8×3.5ｍの楕円形を呈し、深さ40cmを測る。多数の中期土器（68・70・75・79～83）が出土。

同様の土坑にＳＫ15がある。破片であるが、中期土器片が出土している。また、ＳＫ８は彎曲する楕円形の土坑で前期土器片が出土している。

ＳＫ13；（Ｋ～Ｍ，20）区に於いて検出。一辺10ｍ前後の方形を呈するもので、深さ北側で15cmの浅い土坑である。北側と東側の一部しか検出できなかった。前期甕形土器（40・41)、蓋形土器（31）が出土している。

また、隣接区（Ｍ，19）区に於いても2.8×3.2ｍ、深さ20cmほぼ方形を呈する小形の土坑が見付かっているが、遺物は明らかでない。

○溝　　址

幅１～２ｍ、長さ５～７ｍ程度で終る溝と、それ以上に長くのびる溝がある。前者の殆んどは中期に属するものである。

ＳＤ２；（Ｎ～Ｐ，11）区に於いて見付かる。幅西側で0.8ｍ、東側で2.3ｍ、深さそれぞれ15cm、40cmを測る。ＳＤ１に切られている。東側の部分より比較的多数の中期土器片が出土した。

ＳＤ３；（Ｍ～Ｎ，12～13）区の境界部分に於いて検出。幅１ｍ、長さ5.8ｍ、深さ30cmを測る。溝底はなだらかである。中期壺形土器（66）が出土している。

ＳＤ９；（Ｌ～Ｍ，17）区。幅1.2cm、長さ７ｍ、深さ60cmを測る。ＳＤ３と比べやゝ深くて、Ｖ字形に近い形を呈する。僅かに中期土器片が出土したのみである。ＳＤ10、11と関連して方形周溝と呼べるものかもしれない。

ＳＤ14；（Ｐ～Ｑ，20）区。楕円形の土坑と溝が重ったものである。溝幅１ｍ、深さ20cmである。土坑は径３×７ｍ、深さ30cmである。溝の部分より前期甕形土器（44・45)、蓋形土器（33）が出土している。

ＳＤ16；（Ｈ，18）区より（Ｑ，25）区まで大きな孤状を描く溝である。（Ｈ，18）区では幅1.2ｍ、深さ30cm。（Ｎ，25）区では幅１ｍ、深さ40cmを測る。（Ｎ，25）区より東では不明瞭である。遺物の出土はあまり顕著でない。ただ、（Ｐ，25）区からは壺形土器（71）が出土している。

以上の溝址の外にＳＤ17・18が見付っている。浅い浅である。微高地の裾の部分に並行して走る溝で、弥生時代に属するものと思われる。

2）古墳時代遺構

ＳＤ１；発掘区の北東隅に於いて発見。（Ｏ，10）区より、（Ｔ，10）区まで円形にめぐるものである。一部水田によって既に破壊されている。 径30ｍ程度のものである。西側の溝で幅１ｍ、深さ50cmを測る。溝底は比較的平担で、溝の形は逆台形を呈している。溝内からは多数の埴輪片が出土しており、溝底についているものが多いが、なかには20cm近くも浮いているものもある。溝内の土は黒褐色を呈する比較的粒子の粗い砂質土である。一方、東側では西側ほど溝の肩は明白でなく、なだらかである。Ｕ列から東は表土より10cm程度で砂質の茶褐色土となり、その下部に弥生式土器を包含する青みがかった黒褐色土がＶ列近くまで認められる。このため、東側の肩部分は明瞭ではない。西側同様、多数の埴輪片が出土しており、土師器、須恵器も少量ではあるが出土している。

3）歴史時代遺構

歴史時代の遺構として明らかに出来るものは井戸のみである。他にもこの時期に属するものがあるかもしれないが、明らかにし得なかった。井戸ＳＥ19～22のうち、径40cmの曲物が出土したＳＥ21のみは山茶椀の時期と考えられるが、他は更に新しい時代のものである。

Ⅳ　遺　　物

1）弥生時代前期の土器

壺形土器、甕形土器、鉢形土器、蓋形土器等がある。これらは遠賀川系と考えられる第Ⅰ種土器と、東海地方の影響と考えられる条痕文系土器とその他の第Ⅱ種土器に区分される。

Ａ）第Ⅰ種土器

○壺形土器（ＰＬ３・４・８・18・19・22）

壺形土器の多くは口径10～15cmのものであるが、なかには口径42cm以上を測る大形品もある。いずれも焼成良好な堅緻な土器で全面が篦研磨されている。胎土には径１～３mmの砂粒を比較的多量に含み、雲母片も含んでいるのが目立つ。口径の小さなものについて、まずみてみると、いずれも口縁部がゆるく外反し、口唇部がゆるい稜をなすものである。口唇部は殆んどが装飾されないが、まれに刻目を有するもの（22・91）篦描き沈線の施されるもの（20）がある。93は前期新の段階の土器片であり、口唇部に沈線、刻目を有し、口縁部内側に浅い凹線が二条めぐるものである。

次に、紋様についてみると、口頸区分紋様（佐原真氏の語句に従う〔佐原真　1967〕）には段をなすもの（１～４・８・90・95・232）、削り出し凸帯のもの（５～７）、および篦描き沈線のもの

（11・12・16～23・92）がある。段をなすものは口縁部側が高く、頸部側の低いものが一般的であるが、中には4のようにつまみあげられたようなものもある。又、8は頸部側のみを削り段としたものであり、段上に一条の箆描き沈線が施されている。削り出し凸帯についても、凸帯上に箆描き沈線を施すもの（5）、円形刺突文を施すもの（7）もある。箆描き沈線については、二条のもの（11・12・16・17・20）が最も多くみられるが、三条のもの（18・19）それ以上に多条のもの（21・22）がある。箆描き沈線の数が多くなるにつれ、区分紋様が帯状紋様となり、口縁部も薄手で大きく外反する傾向がある。これらの外に口頸区分紋様のない例（9・10・233～237）もある。

頸胴区分紋様についてみると、口頸区分紋様同様、段をなすもの（11・14）、削り出しによる段をなすもの（4・12・13）、箆描き沈線を施すもの（16・20・21・24）がある。段をなすものには、一条の箆描き沈線の施される例（4・11・13）が多い。箆描き紋様の施されるもののなかには、削り出し段上に箆描き沈線を施し、箆による刻目、あるいは円形刺突文を施す例（113・114・119・120）がある。以上のほかに僅か一例であるが、幅の広い刻目の有する貼付け凸帯の施されているもの（117）がある。沈線のものは二条のもの（16）三条のもの（20）があり、口頸区分紋様が帯状紋様となる例（21・22）では、沈線がなく、あっても痕跡程度になっている。

口径42cm以上の大形品の壺形土器についてみると、高さ80cm以上と考えられるものであり、いずれも焼成が良好である。口縁部近くでは比較的薄手で他の土器と差違はないが、底部近くでは数cmと厚くなっている。全体の形は小形品と変らない。15についてみると、口唇部に一条の箆描き沈線が施され、頸部にも二条の箆描き沈線が施される。頸部より胴部にかけては僅かに中ほどで膨らむ。頸胴区分は低い削り出しの段となっている。他の例には口唇部の無文のものもある。

続いて、壺形土器の箆描き紋様についてみてみると、多くは赤褐色を呈する土器でよく箆研磨されている。全形の窺えるものはない。頸胴区分の削り出し凸帯の上下に2～4条の孤状を描くもの（94・96～98）が多い。木の葉状を呈するもの（99・100・105・111）もあるが、中心線を描くものはまれである。孤状を向い合せたもの、数条の孤状を重ねたもの、×印を繰り返すもの等がある。綾杉を描くものも見られる。又115は削り出し段の胴部側に貝殻腹縁を三段押しつけたものである。新しい段階のもの（（117・118）では箆描き直線文の多条化が目立つ。

箆描き沈線の紋様については、25のように底部近くに二条の沈線を二段施す例や、121のように底面に施す例も少なからず見られる。

○甕形土器（ＰＬ５・８・19・23）

全て口縁部がゆるく外反し、胴部はあまり張らない器形で、口縁部より胴部にかけての厚さのかわらないものである。大きさは口径9cm、高さ8cmの小形品から口径30cm近くの大形品まである。器面の調整については、多くは細かい刷毛目によっているが、無文のものも少なからずみられる。

口唇部には細かい刻目をもつものが一般的であるが、なかには無文のもの（36・45・48・52・124・125・238・239)、沈線の施されるもの（247）もある。頸部についてみると、無文のもの(36～42・124)、箆描き沈線の一条のもの（43～45・126・242・243)、二条のもの（46～48・125・127・244・245)、三条のもの（49・128・248・249)、多条のもの（133）がある。箆描き沈線の間に刺突の見られるもの(50・51・129～131・246）もある。又、壺形土器同様に削り出し凸帯のもの(52・132・250～253)がある。253の凸帯上には一条の箆描き沈線が施されている。53は削り出しの段ともいえるもので、下側のみを削って段としている。段上に一条の箆描き沈線をひき、その、間に刻目を施している。

54・134は口唇部が僅かに肥厚し、細かい櫛状工具の刺突が見られ、頸部には半裁竹管による沈線が二段みられるものである。

これら甕形土器の口唇部の刻目の有無、頸部の沈線の有無およびその条数、器表面の調整法の差違については、規則性はないようである。40には補修孔がみられる。

○蓋形土器（ＰＬ４・８・18・19・22)

壺形土器の蓋（27～31・122・123）と、甕形土器の蓋（32・33）がある。壺形土器の蓋には扁平な円板状のもの（27）と笠形をなすもの（28～31）がある。27・28は黒色を呈する全面研磨された堅緻なものである。27・29には二孔づつ対称の個所に孔が穿たれている。30・31はつまみの部分を有するもので、30のつまみの部分には一孔が穿たれている。

122・123はいずれも小破片であるが、表面に箆描きによる木葉紋を描いている。

甕形土器の蓋はともにそり気味に外方に開くもので、径21cm、高さ7.5cmを測る。

○鉢形土器（ＰＬ４・７・19)

口径35cm以上の大形品（34・55）と、口径16.2cm、高さ10.3cmの小形品（35）がある。34は口縁部がゆるく外反し、胴部も僅かに膨らむ器形で、口縁部は稜をなす。頸部には幅のせまい削り出し凸帯が一巡している。35は口縁部より底部まで真直ぐにつづく器形で、口縁部および底部中央は薄手であるが、胴下半部は厚手である。褐色を呈しており、表面は磨滅している。55は鉢形土器というより甕形土器といった方がよい器形であるが、淡褐色を呈し、全面箆研磨されているため、一応鉢形土器とした。口縁部が直角に近く外反する。頸部に二条の箆描き沈線を施している。

Ｂ）第 II 種 土 器

横方向の条痕を全面に施す壺形土器と、半裁竹管を多用している甕形土器がある。

○壺形土器（ＰＬ６・９・23)

頸部が筒形に長いもので、口縁部が僅かに外反する。口唇部直下に凸帯をめぐらし、その上に圧痕を加えている（56・135～140)。141は凸帯をもたないものである。142のように肩部にも圧痕のある凸帯をめぐらすものもある。頸部より胴部にかけては（143・144）大きく膨らみ、球形の

胴部となるものと思われる。全面に横方向の条痕を施す。条痕は幅が広く、深いものであり、底部（59）近くまで施されている。これらの条痕の有する土器は全て淡褐色を呈している。細砂を含み、焼成の良好な堅緻な土器である。

○甕形土器（ＰＬ６・９・23）

全形の窺えるものはないが、大きく開く口縁部に、あまり頸部でくびれない器形と思われる。口縁部のみ僅かに厚手である。口唇部に刻目をもつもの（58・145）、口縁部内側に段伏部を有し箆描き沈線のめぐるもの(58)も見られる。口唇部近くあるいは頸部に半裁竹管による並行沈線を二段施している。小さな間隔をおいて一巡するもの（58・146・147)、孤状を繰り返すもの（59・145）がある。146の口唇部にも半裁竹管紋が見られる。148・254も同様の破片と思われる。149は胴部破片であるが、刷毛目のあと横方向の沈線の下に縦方向で波状に半裁竹管紋が見られる。

これら甕形土器は壺形土器同様比較的焼成のよい土器で、胎土もかわらない。しかし、色調は赤褐色に近いものが多い。

第Ｉ種土器とした遠賀川系土器をみると、多くは前期「中」の段階に比定される。佐原真氏の分類に従えば、壺形土器の中段階は削り出し凸帯の盛行する時期である。更に中段階を特徴づけるものに、削り出し凸帯に伴う木葉紋がある。甕形土器に於いては時期区分はなし難いが、頸部に削り出し凸帯及び箆描沈線間に刺突の見られる例は中段階に属するものであろう。これらの特徴をそなえた遺跡としては兵庫県吉田遺跡〔小林・直良1932〕があげられる。

新の段階と考えられる壺形土器は細い頸部に多条の箆描沈線の見られるもの（21～23）及び口縁部裏に凹線のめぐるもの（93)、更に多条の箆描沈線が肩部にめぐり、貼り付け凸帯も見られる例（117・118）等であろう。又、甕形土器では59・154等があげられる。この段階の土器は多気郡金剛坂遺跡〔山沢・谷本　1967〕の一群に似ている。多条の箆描沈線の壺形土器は佐原真氏のいうｂ形態〔佐原真 1968 〕であり、新の後半に属するという。

一方、第II種とした土器についてみると、56をはじめとして、粗い条痕を施す土器は従来「西志賀式」と呼称されていたものと思われる。又、やゝ趣を異にする半裁竹管を多用する甕形土器の一群についてはあまり例を見ないものである。しかし、これらの土器は胎土、焼成が前者と似ており、新段階の甕形土器に半裁竹管が使用されていることより、一応ここでは新段階より遡るものと考えたい。

2）弥生時代中期の土器

壺形土器、無頸壺形土器、甕形土器、鉢形土器等がある。これらの土器のうち甕形土器については前期土器同様第Ｉ、II種に区分される。

○壺形土器（ＰＬ６・７・９・20・24）

口縁部が大きく外反するものである。口唇部に刻目を入れるも（60)、櫛状工具の刺突のみられ

るもの（62・63）、櫛描き波状文のもの（151）、櫛目のあとおさえつけによって小さな波状口縁となっているもの（64）、無文のもの（61・66・150・257）等がある。又、口縁部内側に円形刺突のあるもの（150）、櫛の刺突のあるもの（151）がある。頸部には櫛目文が施される。幅広く密に施すもの（60～62・64・257・258）間隔をおくもの（65）がある。66は三条単位の櫛目を密に施しているが、三条の中央のものはやゝ浅くなっている。66は無頸壺に近い形で、頸部より胴中央部まで密に深い櫛目を施している。胴下半部は横方向のヘラ研磨される。又、頸部に波状文の見られるもの（258）、簾状文のもの（152）もある。67は口縁部の状態は不明である。全面刷毛目調整のあと、細かい櫛描き沈線文を二段めぐらし、胴下半部は篦研磨している。68は刷毛目のあと、頸部より肩部にかけて、櫛描き横線紋と波状紋を交互にくり返し、肩部には二条、胴中央部には三条の貼り付け凸帯を巡らしている。貼り付凸帯は幅のせまいもので、その土に櫛状工具による刻目をつけている。72・153・154は篦描き沈線の間に櫛目を施すものである。櫛目文にはこの他に261～264がある。69・70は底部破片である。あげ底になっており、焼成前より孔があけられている。69は一孔であり、70は二孔が対称に二ヶ所あけられている。70は蓋かもしれないが、蓋にしては深いものである。

○無頸壺形土器（ＰＬ７・24）

78は小形の無頸壺で、二孔が対称に二ヶ所あけられている。砂粒を多く含み、表面は粗雑である。81は口唇部が直立するもので、胴中央部まで篦描き沈線が施される。篦描き沈線は並行横線、山形を交互にくり返している。黒褐色を呈する焼成の良い土器である。

○甕形土器（ＰＬ７・９・24）

△第Ｉ種土器

口縁部がゆるく外反し、なだらかに底部につづくもので、74を除いて前期土器と器形はあまりかわらない。口唇部に刻目を施す類が多く頸部には櫛描き沈線が多数めぐるものである。167は甕形土器にしては篦研磨されたあと、櫛目を施している。又、167は間隔をおいて櫛目紋をめぐらす、74のみは他と器形が異なり、頸部で大きくくびれ、肩部の張りの大きいものである。口唇部の両端に刻目をめぐらし、全面に縦方向の刷毛目のあと、肩部分に櫛描き沈線を施す。口縁部内側には横方向の刷毛目が見られる。赤褐色を呈し、焼成のよい土器で、非常に薄手に仕上げられている。焼成後に径５cmの円い孔が穿たれており、或は甕棺として使用されたものかもしれない。口縁部内側に刷毛目のみられるものに272～275がある。75は器形は前期のそれと全くかわらない。口縁部はあとで貼り付けたもので、指による押えつけのあとがのこっている。

△第Ⅱ種土器

条痕を全面に施す類である。口縁部が大きく外方に反る器形が多いが、なかには僅かに内彎するもの（158）、直立するもの（159・165）がある。口唇部が断面三角形となり稜を有するものが多く、刻目の見られる類(155・157)がある。又、口唇部が丸く僅かに肥厚気味のもの（163・164

・267～271）も見られる。条痕は前期の土器の条痕に比べ細いものが多い。僅かに161のみが太いものである。条痕の方向は口縁に並行する横方向のものが多い。76は頸部より斜下方向に長く施す。77は雑多な方向に短かい条痕が施される。口縁部内側に１cm程度の幅に並行線および波状を描くもの（155・157・160）があり、159の内側には幅広く条痕が見られる。166は壺形土器の口縁部かもしれない。条痕による波状、横線がみられる。

○鉢形土器（ＰＬ７・20・24）

口縁部が僅かに内彎するや、小形のもの（79・80・83・260・266）と、大きく外方に反る大形品（82）がある。小形品は刷毛目調整のあと、４～５条の櫛目文を施すもの(79・266）と、全面を箆研磨して平滑に仕上げたもの（80・83・260）があり、83は球形に近い形を呈する。

82の大形品は破片のため突起の数は不明である。口縁端部に刻目を施し、頸部には４条の櫛描き沈線のあと、楕円形の突起を貼り付けている。

以上の外に小形の径８cm、高さ５cmに満たない鉢形土器（84～86）がある。いずれも手捏の土器である。

中期の土器の多くは東海地方の編年では、朝日式に相当するようである。即ち、櫛目文が多用されている。器形についてみると、壺形土器は前期新のｂ形態とされる器形をうけついでいるものもある。しかし、胴部中央が大きく外反し、恰もａ形態の系統とも考えられるもの（67・68）もある。櫛目文の多用は顕著であるが、68のように貼り付け凸帯をもつものや81のように箆描き沈線もみられる。

貝田町式と考えられる土器には72・153・154等がある。

一方、第II種とした条痕文系土器については、朝日式、貝田町式の区別はし難いが、口唇部裏側には櫛状工具の刺突は見られず、平行状線が多く見られることよりして、朝日式に伴うものが多いような気がする。

なお、ＰＬ９―170～173は一見縄文土器とも考えられる土器である。

３）弥生時代後期の土器（ＰＬ７）

僅か数点の弥生時代後期の土器が出土している。87は高杯形土器の脚部である。櫛目文を二段めぐり、三孔が穿たれている。88は甕形土器の台部分である。淡褐色を呈し、焼成はあまりよくない。調整も雑で古墳時代の土器とも考えられる。89は小破片であるが、Ｓ字状口縁土器の口縁部によくにた部分を有し、更にその上につづく器形で、手炻形土器かもしれない。刷毛目を施した焼成のよい土器である。

４）弥生時代の土製品・石器（ＰＬ10・26）

○紡 錘 車（174）

径5.4cm、厚さ1.7cmを測る円形のもので、中央に径６mmの孔があけられている。茶褐色を呈する堅徴なもので、胎土中には細砂、雲丹片を含む。全面を箆研磨している。

○土　　錘（175～177）

長い筒形をなすもので、中央部で僅かに膨らむ。径2.5cm、両端で２cmを測る。長さ175―５cm、176―６cm。孔径1.1cm、砂粒を多く含む。

○石　　錘（178・179）

扁平な楕円形の河原石を打ち欠いたもので、178は両端を、179は四方を打ち欠いている。石質は178―花崗片麻岩、179―砂岩。

○凹　　石（180）

厚さ2.7cm、径7.3×10cmの楕円形を呈し、中央部に径２cmの凹みを両面にもつ。全体に磨かれている。石質は輝緑岩。

○石　　斧（181～189）

小形磨製石斧（181）、大形蛤刃石斧（182～186）、打製石斧（187～189）がある。小形磨製石斧は刃部は片刃状に磨いている。石質は結晶班岩、大形蛤刃石斧はいずれも破損している。182～184は鋭い刃部を有するものであるが、185、186は使用によってか、刃部は平担になっている。186の刃部上部に敲打された痕が見られる。石質は182～184は班励岩。185は結晶片岩、186は砂岩。打製石斧187は径　cmの円形の扁平な石の先端部を両面から打ち欠いたもので、石質は砂岩。188は結晶片岩製で刃部のみを打ち欠いている。189も結晶片岩製である。刃部は欠損しており不明。

○敲　　石（190～193）

190・191は方柱状を呈し、一見磨製石斧と思われるものである。両端は平担な面を有し、敲打されたものと思われる。石質は二個とも砂岩である。192も扁平な楕円形を呈するもので石斧かもしれない。先端は孤状を描き、刃部は鈍角である。石質は輝緑岩。193は楕円形を呈する部厚いもので、両端、及び両面に敲打した痕跡がみられる。石質は石英班岩。

以上の外に石器としては砥石（195・196）及びサヌカイト製の掻器と思われるもの(194）等がある。又、石器ではないが軽石が弥生式土器とともに10点近く出土している。

５）古墳時代の遺物

この期の遺物には埴輪、須恵器、土師器がある。全てＳＤ１から出土したものであり、埴輪がその大部分を占める。

Ａ）埴　輪（ＰＬ10・25）

埴輪はいずれも褐色、淡褐色を呈する焼成の良好なもので、胎土に砂粒を多く含む。円筒埴輪には２～３個体の須恵質のものがある。埴輪の種類には馬形埴輪、人物埴輪、家形埴輪、朝顔形埴輪、円筒埴輪、その他不明の埴輪がある。円筒埴輪が最も多い。

○馬形埴輪（197）

ＳＤ１の（Ｏ～Ｑ，11）区らが出土。一個体分のみである。後脚上半部及び顔の一部分を欠損するが、ほゞ全形の窺えるものである。高さ72cm、全長82cmを測る。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、比較的薄手のつくりである。

顔の部分は、楕円形の鏡板と引手を貼り付けており、手綱は鞍の前輪につづいている。たてがみはきれいにナデつけられており、その先端は束ねられたものと思われる。耳もその根元としか残っていないが、径４cmの筒形のものである。面繋は不明である。胸の部分は僅かに膨らむ。胸繋は有しない。前脚は後脚とともに筒形で、徐々に細くなるが、その先端は貼り付けによって三角形に凸出する。脚はやゝ開き気味である。前脚の上部に、径４cmの四角形の孔があけられている。鞍は前輪、後輪ともに僅かに後へ傾斜する。鞍褥は対称的に四個の瘤状の突起がつけられ、四角形の刺突文が描かれている。浅学のため確言出来ないが皮革製品による鞍褥であろう。鐙は前輪の区分より障泥の部分へ、ヘラ描き沈線によって描かれる。障泥は一部欠損するが、厚さ0.8cmの板状を貼り付けたものである。杏葉、尻繋も粘土紐を貼り付けたもので、杏葉は円形の簡単なものである。雲珠、辻金具等は特別にはあらわしていない。尾の部分にも粘土紐を巻きつけている。腹部は平担な板状で径20×30cmの四角形に穿たれている。

顔、たてがみ、鞍および障泥の部分はナデによる調整しており、他は細かい刷毛目を施している。粘土紐の貼り付け、ヘラ描き沈線はその後に描いている。

○人物埴輪（198・199・277～280）

個体数で５個体確認することが出来た。いずれも破片で、全形の窺えるものはない。頭部は全く発見されなかった。

198；衣と裳をつけた女子像である。胴部のみが確認出来た。手先は不明であるが、 両手を前にまげたものである。衣は襟を左まえにかさねたものであるが、つけ紐は見当らない。裾はあまり開かない。前の中央部が短かくなり、紐状のたれさがりがある。沈線によって、背中に十文字に交わる襷を描いている。胸より下は細かい刷毛目を施している。

裳は衣につづく曲線で外方に開くものであるが、先端は不明でその長さはわからない。刷毛目のあと、横方向の沈線を一条ひき、次に斜め方向の縞模様を描いている。

裳の下は199同様の円筒がつくものであろう。

199；198同様女子像と思われる。肩部以上は不明である。手は右手しかわからないが、やゝ短かい手で、下にそのまゝ下げている。手先は指をあらわし、手首には何かを巻きつけていたらしく、剝落のあとが見られる。衣は前であわせたもののようで、つけ紐が二ヶ所認められる。右脇下にも前同様二本の縦方向の沈線が見られるが、左側にはない。横方向の二段の沈線をひき、その沈線上に径１㎝程度の瘤状突起を４～５㎝間隔に貼り付けている。198同様に襷をしているようである。

腰の部分に幅3cmの帯をまき、前で結び垂らしている。帯は後で貼り付けたもので、縦の沈線を描く。結びの部分には斜格子状に沈線を描いている。

裳は衣との区別を明らかにしていない。刷毛目のあと、沈線による横縞の模様を描いている。その下は、中央部で僅かに膨らむ円筒である。横の部分に二個の孔をあけている。裳の部分に比べやゝ粗い刷毛目を施している。

277；女子像の胴上部の破片である。手は前方へ曲げる。衣は左前にあわせており、右下につけ紐とも思われる粘土紐の貼り付けがある。襷をかけているようである。

278；胴部の右部分破片である。なだらかな肩を有し、手は短かい。指先はあとで貼り付けたものであるが、一部分剝落しており不明瞭である。衣はたて襟で、左前にあわせている。淡褐色を呈する焼成のやゝわるいものである。

279；右手部分の破片である。武装埴輪と思われ、籠手をあらわしている。沈線によって模様をつけ、手纏緒は粘土紐の貼り付けである。淡褐色を呈する堅い埴輪である。

280；外方に開く筒形の破片で、先端部は楕円形となる。刷毛目のあと数段の沈線を描いている。裳もしくは草摺と思われる。

○朝顔形埴輪（200）

全部で三個体近くある。茶褐色を呈する焼成の良い埴輪である。口縁部が二段に大きく外反し、頸部が細くしまる。円筒部はまず一旦膨らみ、徐々に細くなる。節は三段つけられ、円い透しが、中の二段にあけられている。刷毛目は口縁部上部では斜方向に、下部は縦方向に、円筒部及び口縁部内側には横方向に施している。刷毛目は部分的に簾状を呈する個所がある。

○円筒埴輪（201～207）

総数で15個体近くある。高さ40cmまでのやゝ小形のものである。多くは黄褐色を呈する焼成の良好なものである。205は須恵質で灰色を呈している。同様の須恵質の埴輪は他に2個体あった。二段の節を有し、中央に二孔の透しがある。表面は多くは横方向の刷毛目であるが、部分的に縦方向の刷毛目も見られ、横方向の刷毛目は刷毛状工具を一旦途中で止めて、簾状を呈する部分もある。又、内側は上部のみ横方向の刷毛目が見られる。それより下は箆削りされている。粘土帯の継目の見られるものもある。刷毛目のあと箆による記号が描かれている。上段に十文字を描くものもあるが、中段の孔の右横に描くものが多い。

○家　形　埴　輪

総数30点出土している。全て同一個体と考えられる。焼成、胎土等は他の埴輪とかわらない。切妻造の屋根をもち、棟の長さ38cmを測る。棟が軒よりも僅かに長いようである。両端に幅9cmの破風板がつけられている。全面に横方向の刷毛目を施したあと、二条の沈線によって、網代の押えを表現しているようである。中央には直孤文とも思われる文様が描かれている。一方（285）では上半部のみであるが、他方（286・287）では軒先近くまで描いている。壁の部分もいずれも

破片である。隅近くに入口と思われる切り込みの見られるもの(289) や、平行沈線及び斜線を描くもの (287・288) がある。裾には凸帯が一巡している。

○その他の埴輪

以上の埴輪の他に形態の不明なものが数点ある。281は灰色を呈するもので、円形の貼付文、及び刺突が見られる。282、283は同一個体である。円筒を呈し、節の上下に三ヶ所の透しが交互に見られる。283は厚さ0.8cmの板状のものに、粘土紐を貼り付けたものである。

B) 須 恵 器 (PL12)

○瓶 (208・209)

208；口縁部が大きく外方に開くものである。口縁部と頸部の境には凸帯が巡る。頸部は細く、胴部は小さい。胴部最大径は口径とかわらない。中央に二条の沈線が巡る。底部はやゝ尖り気味である。口縁部と頸部に櫛描き波状文を描いている。

209；口縁部か僅かに内彎気味に立ちあがるもので、頸部は短かい。胴部は大きく外方に張り出す。口縁部には櫛描き波状文が見られる。前者に比べ平滑に仕上げられている。

○杯 (210)

口縁部が長くて内傾し、受部は外上方に張り出す。杯部は深く、受部より2cmばかり下より底面は箆削りされている。

○甕 (211)

口縁部が大きく外反し、口唇部が垂直に立ちあがる。端部およびその下に三条の凸帯がめぐる。凸帯は断面三角形を呈する。頸部近くに四条の櫛描き沈線が描かれている。

C) 土 師 器 (PL12)

○壺 (212)

破片のため全形は窺えないが長頸壺と思われる茶褐色を呈する軟質な土器である。口縁部が真すぐに外方に立ち、頸部は段をなしてくびれる。胴部は外方に大きく張り出すものであるが、扁平な楕円形を呈するものであろう。

○杯 (213)

口唇部が僅かに外方に反る薄手の土器である。口縁部は横なでで、杯下半部は指による押えつけである。

○高　　杯 (214・215)

214；深い杯部と短かい脚部を有する厚手の土器である。口唇部が断面三角形を呈して内傾する。口縁端部は外方に突き出て、深い杯部につづく。脚部は短かく、端部は僅かに外に張り出す。灰褐色を呈し、砂粒を多く含む。壺、杯や次の215の高杯の胎土焼成とはやゝ異なる。SD1からの出土であるが、あるいは弥生前期、もしくは中期初頭に属するものかもしれない。

215；杯部は213同様に口唇部のみ僅かに外方に反るが、立ちあがりは急である。脚部は裾部分で

外反する。その端部は内側に僅かに曲がる。

古墳時代の遺物、須恵器、土師器、埴輪は全てＳＤ１からの出土である。時期決定を須恵器によってしてみると、久居古窯２・４号窯址出土品に似ている〔小玉・山沢　1968〕。即ち、瑞は大きく開く口頭部は短かく、杯形土器では内傾する口縁部が幅広く、深いものである。久居古窯2・4号窯址は陶邑古窯址群のＴＫ23型式に位置づけられている。

6）歴史時代の遺物（ＰＬ12・20・26）

歴史時代の遺物には山茶碗、陶器、土師器をはじめとして、多数の瓦塔片更に僅か二点の瓦器片がある。いずれも表土下の第II層から出土したものであるが、遺構は明瞭でない。

○山 茶 椀（216～219）

口径16～17cm、器高７cm前後のものである。底部より口縁部に向って真すぐに開く、217のみは口縁部がたちあがる。高台はいずれも付高台で、216・217はやゝ高い。灰色を呈して、胎土にはあまり砂粒を含まず緻密である。

○陶　　器（220・221）

220；常滑焼の甕である。茶褐色を呈し、砂粒を多く含む。折り返し状の口縁部をもち、肩部はあまり張らない。

221；底部のみの破片である。（Ｋ，11）区より出土したもので、中には少量の骨があり、蔵骨器として使用されていたものと思われる。淡い茶色がかった灰色を呈し、須恵質の土器である。胴下部に二条の沈線がめぐる。緑色の釉薬が流れおち、一部底部にまでおよんでいるため、底部は他の土が付着している。

○土 師 器（222～226）

222；口縁部が僅かに内彎する甕形土器である。口唇部は内側に折り曲げられ、ナデつけて段状をなす。肩部はあまり張らない。器厚３mmの薄手で、胴上部は全面刷毛目が施され、煤が付着している。

223；口径32cmを測る大形の鍔釜である。口縁部は内傾し、口唇より３cm下に幅３cmの鍔をめぐらす。胴部は殆んど張らない。全面に刷毛目を施している。

224；糸切底の小皿である。褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

225～226；手づくねの薄手の小皿である。白黄色を呈する。

○瓦　　塔（227～231・292～299）

総数51点出土した。このうち陶塔が４点ある。一応ここでは瓦塔と一括して述べることにする。瓦塔はいずれも精選された緻密な粘土を用いている。破片のため全形は窺えないが、屋根の部分と軸部がある。陶塔を除いて淡い褐色を呈するものが多い。

227～228；屋根の隅の部分である。隅棟は幅2.2cm、高さ２cmのかまぼこ型を呈している。227は

先端は丸くなっている。丸瓦の部分も同様にかまぼこ型を呈する。芽負の厚さは軒先で1cm、木負の厚さ0.7cmを測る。見上げを見ると、桷は幅1.6cmで鼻の部分は欠損している。桷には木の葉をあてた痕が見られる。飛擔棰、地棰ともに凸形に作っており、棰幅は1.7cmである。地棰の上部は削られており、この部分に下の階が重なるものと思われる。

229；屋根の中央部分の破片で、陶器である。表面に釉薬がかっている。胎土は須恵器とはやゝ異なり、茶色がかった灰色である。つくりは前者とかわらない。

230；屋根の上部破片である。やゝ軟質で黄褐色を呈する。傾斜角度は約24°である。

231；柱の部分である。 一辺1.6で、丸桁は2cm角である。 平三斗を凸形の押えによってあらわしている。同様の破片は296とともに5点ある。

以上の他に、壁の部分（297～299）がある。

これらの瓦塔をはじめ、陶器、土師器の他に瓦器片が二点出土している。いずれも口縁部の小破片である。口唇部が僅かに外にくびれるものである。

歴史時代とした遺物は鎌倉時代より室町時代に属するものと思われる。山茶椀は四日市々智積廃寺ＳＢ13〔小玉道明　1970〕出土品に、土師器については金剛坂遺跡出土品に酷似している。又、陶器(220）は常滑焼であり、天神4号窯式もしくは平井口Ｉ号窯式〔楢崎彰一　1967〕と考えられる。

一方、瓦塔については、従来より奈良時代もしくは平安時代と考えられてきた。当遺跡ではその時代と考えられる他の遺物は殆んどない。陶塔の胎土は蔵骨器(221）とよく似たものである。一応ここでは、鎌倉時代まで降るものと考えたい。瓦塔については石村喜英氏は墳墓標識説を述べられている〔石村喜英　1966〕。当遺跡からはたゞ一点であるが、蔵骨器が出土している。しかし、その出土地点はやゝ異なる。発掘地点が限られた場所であり、或は未発掘地区に墳墓が更にあるのかもしれない。当遺跡から出土した瓦塔はその規模、構造は不明であるが、その数は一個体でなかったと思われる。鎌倉時代の瓦塔の類例はあまりない。僅かに奈良県多門山から室町期の瓦塔が出土した例がある〔伊達宗泰　1955〕。多門山の例は当遺跡のものより更に精巧なつくりである。

V 結　　語

中ノ庄遺跡は弥生時代前期、中期、古墳時代、歴史時代と断続的に営まれた遺跡である。各時代の遺物の時期については先述したので、ここでは若干の問題点を述べて結語としたい。

弥生時代前期の遠賀川式土器の伝播ルートが従来の研究テーマの一つであった。上箕田遺跡の報文〔仲見・真田・大場　1967〕に於いて、真田幸成氏は雲出川流域を指摘された。今回の調査に於いて上箕田遺跡の前段階ともいえる土器群の発見をみた。現在の所、県下に於ける最古の弥生式土器といえそうである。その主体は前期中の段階である。雲出川を下ってきた弥生人は当遺跡より、一方では北進し、一方では東進したものであろうか。

前期第II種とした条痕文系の土器を中の時期に比定した。或は弥生文化が伝播する以前に小規模ながら、当地域にも古い縄文文化をもった人々の集団があったのであろうか。更に、古く紅村弘氏が三重県に主体をもつのではないかとされた赤焼きの土器〔紅村弘　1957〕即ち、口縁部内側に凹線状の沈線のめぐる壺形土器及び半載竹管使用の甕形土器等の一群もこの第II種とした一群の土器の影響をうけたものかもしれない。

続いて、古墳時代についてみると、その時代は先述の如く５世紀後半と考えられる。幅２ｍ、径30ｍ近い規模をもつ周溝の性格については判然としない。標高１ｍ前後の個所には古墳の存在については、そのような言い伝えもない。海岸に近い沖積地の古墳には松阪市朝見地区の三基の古墳（丸山・中塚山・糠塚山）がある。いずれも既に破壊されているが、丸山古墳は径27ｍ、高さ３ｍの規模があり、鏡、勾玉、鈴等が出土したといわれている。かような例を見ると、当遺跡の周溝も古墳に伴うものかもしれないが、明らかな盛土の存在や、それを削平したと思われるものについては確認出来なかった。

古く、森浩一氏は形象埴輪の出土状況について、河川の氾濫の慰撫を神にねがう祭祀を考えてみる必要があるのではないかと指摘されたことがある〔森浩一　1961〕。奈良県石見遺跡に於いて幅６ｍの周濠のある径30ｍの微高地の周縁から多数の形象埴輪が出土しており〔森・伊達・白石　1967〕当遺跡の埴輪の出土状況とよく似ているようである。当遺跡から出土した埴輪も人物、家、馬等である。人物の多くは女性埴輪と考えられるものであるが、頭部については一点も出土していない。更に円筒埴輪についても、他の古墳から出土するものにくらべ、小形品であることも気になる。

参考文献

〔石村喜英　1966〕「瓦塔設立の意趣—墳墓標識説私考—」日本歴史考古学論叢

〔紅村弘　1957〕「名古屋市西志賀貝塚」名古屋市文化財叢書19

〔小林・直良　1932〕「播磨国吉田史前遺跡の研究」　考古学３巻５号

〔小玉・山沢　1968〕「久居古窯址群発掘調査報告」　久居古窯址群発掘調査団

〔佐原真　1967〕「山城における弥生式文化の成立—畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡の占める位置—」史林50巻５号

〔佐原真　1968〕「畿内地方」　弥生式土器集成本編２

〔鈴木敏雄　1957〕「考古学からみた一志郡」　一志郡史下巻

〔伊達宗泰　1955〕「室町時代の瓦製塔について」　古代学研究12

〔仲見・真田・大場　1967〕「上箕田」鈴鹿市教育委員会

〔楢崎彰一他　1967〕「古代中世における手工業の発達・東海・窯業」　日本の考古学歴史時代・上

〔森浩一　1961〕「形象埴輪の出土状態の再検討」　古代学研究29

〔森・伊達・白石　1967〕「奈良県石見遺跡の調査概報」　日本考古学協会昭和41年度大会研究発表要旨

〔山沢・谷本　1971〕「金剛坂遺跡発掘調査報告」　明和町教育委員会

〔小野山節　1959〕「馬具と乗馬の風習」　日本考古学大系３

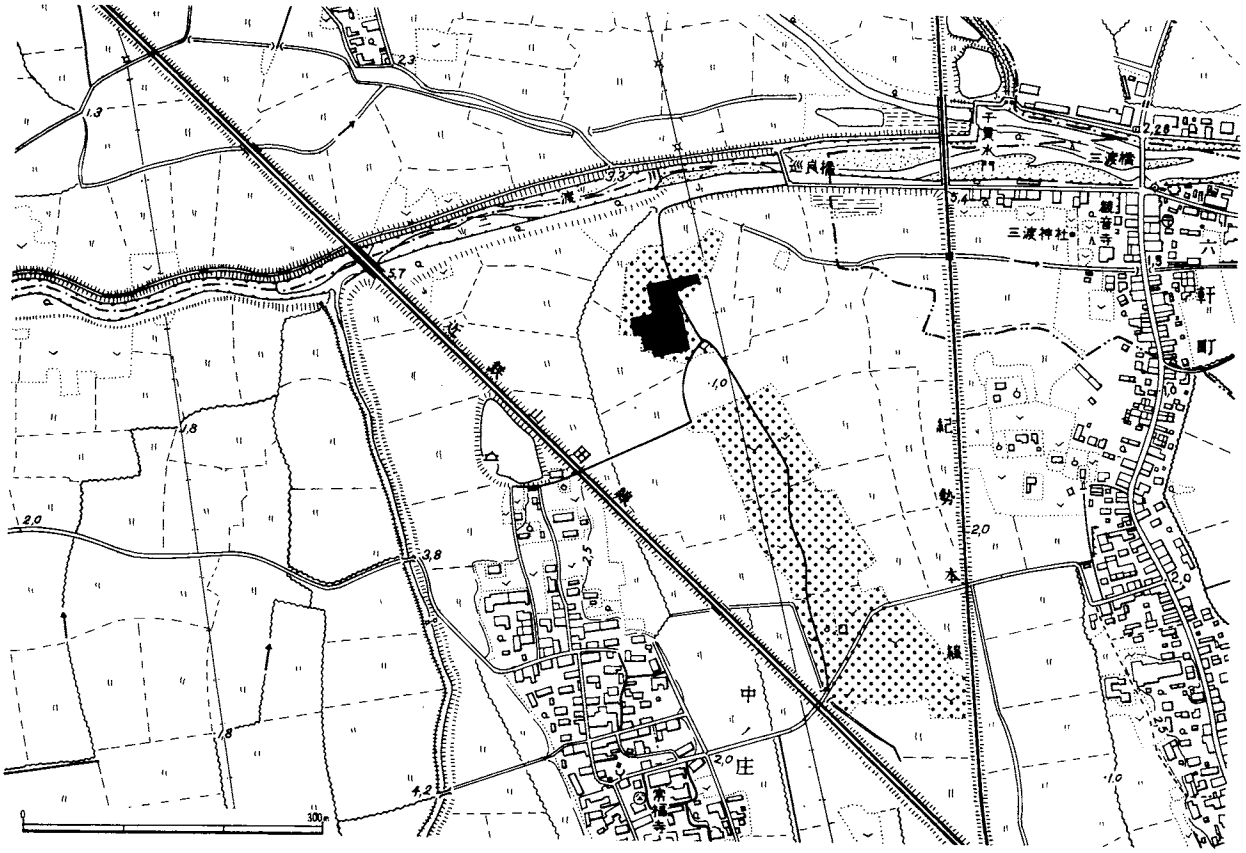
〔紅村弘　1963〕「東海の先史遺跡・綜括編」

〔増田精一　1966〕「馬具・生活の変化」　日本の考古学古墳時代下

〔県立神戸高校郷土研究クラブ　1961〕「上箕田」　三重県立神戸高等学校

図　　版

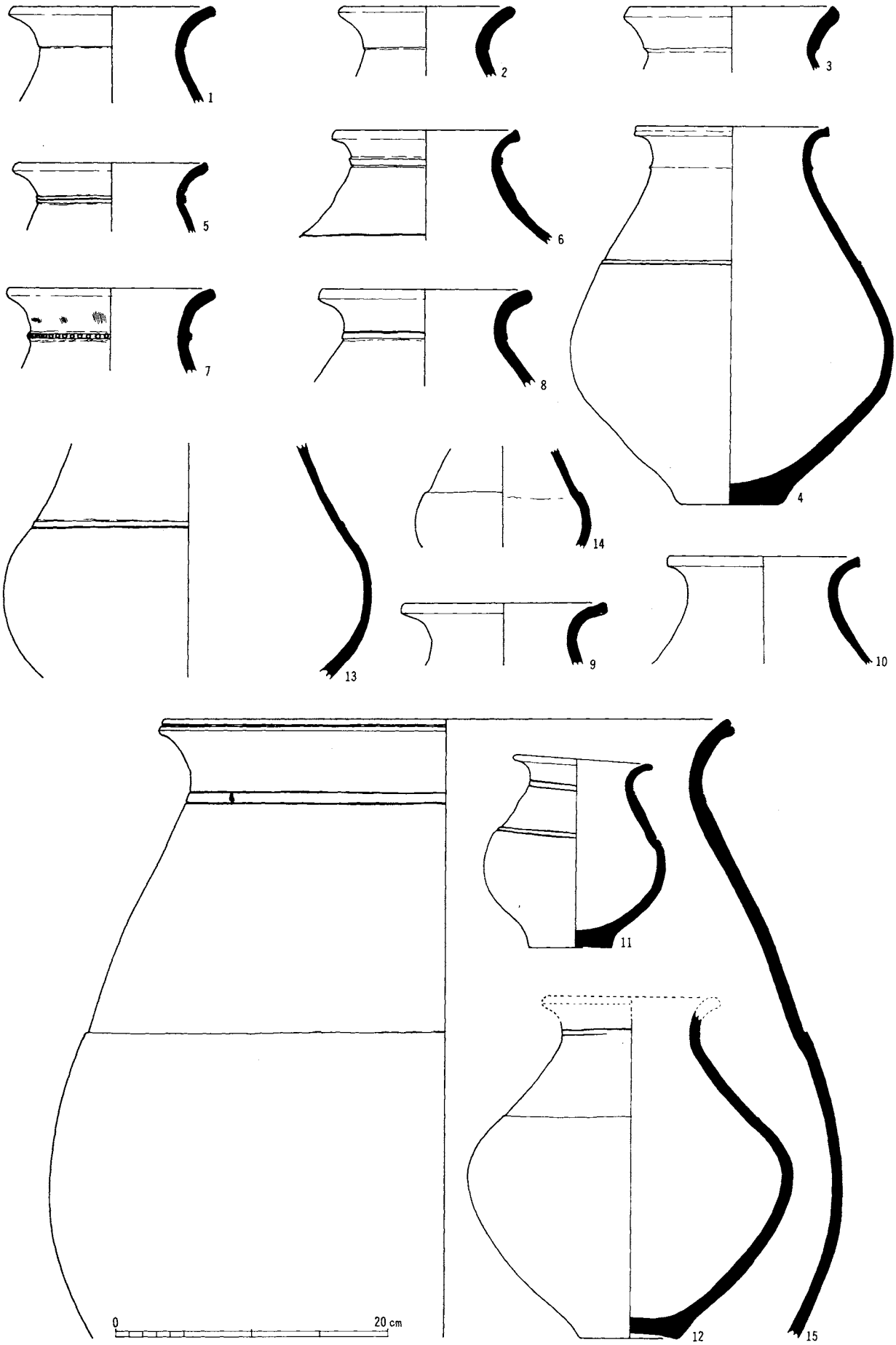
中ノ庄遺跡位置図（国土地理院Ⅰ：50000　二本木・松阪）



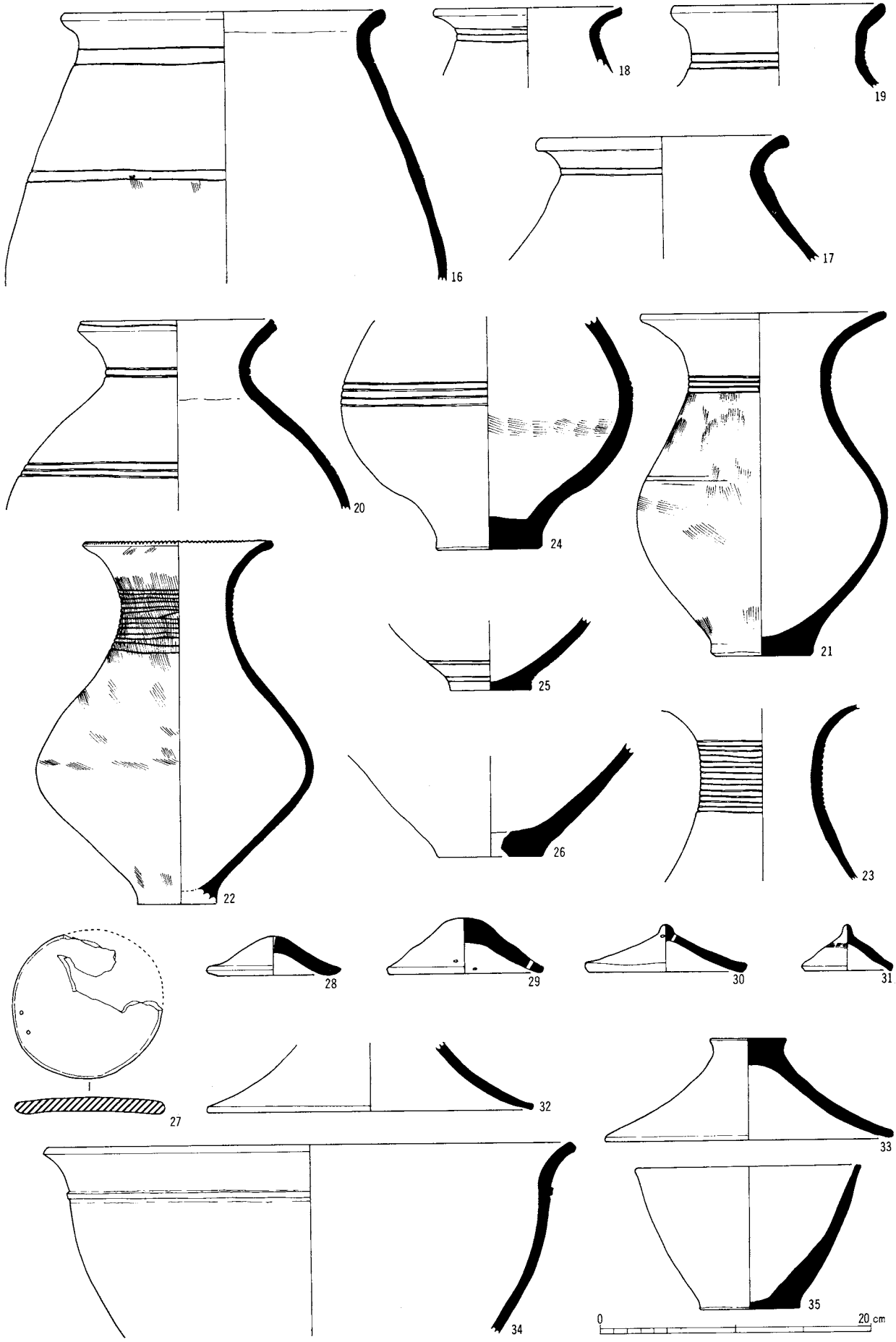
中ノ庄遺跡及び発掘区（国土地理院Ⅰ：5000　Ⅵ—PFⅡ）

K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
E
F
G
H
I
J
10
11
12
3
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
SD1
SD2
SD3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SE19
SD9
SD10
SD11
SK12
SK13
SE20
SD14
SE21
SE22
SD16
SK15
SD17
SD18
弥生時代前期
弥生時代中期
古墳時代
歴史時代
0
20m

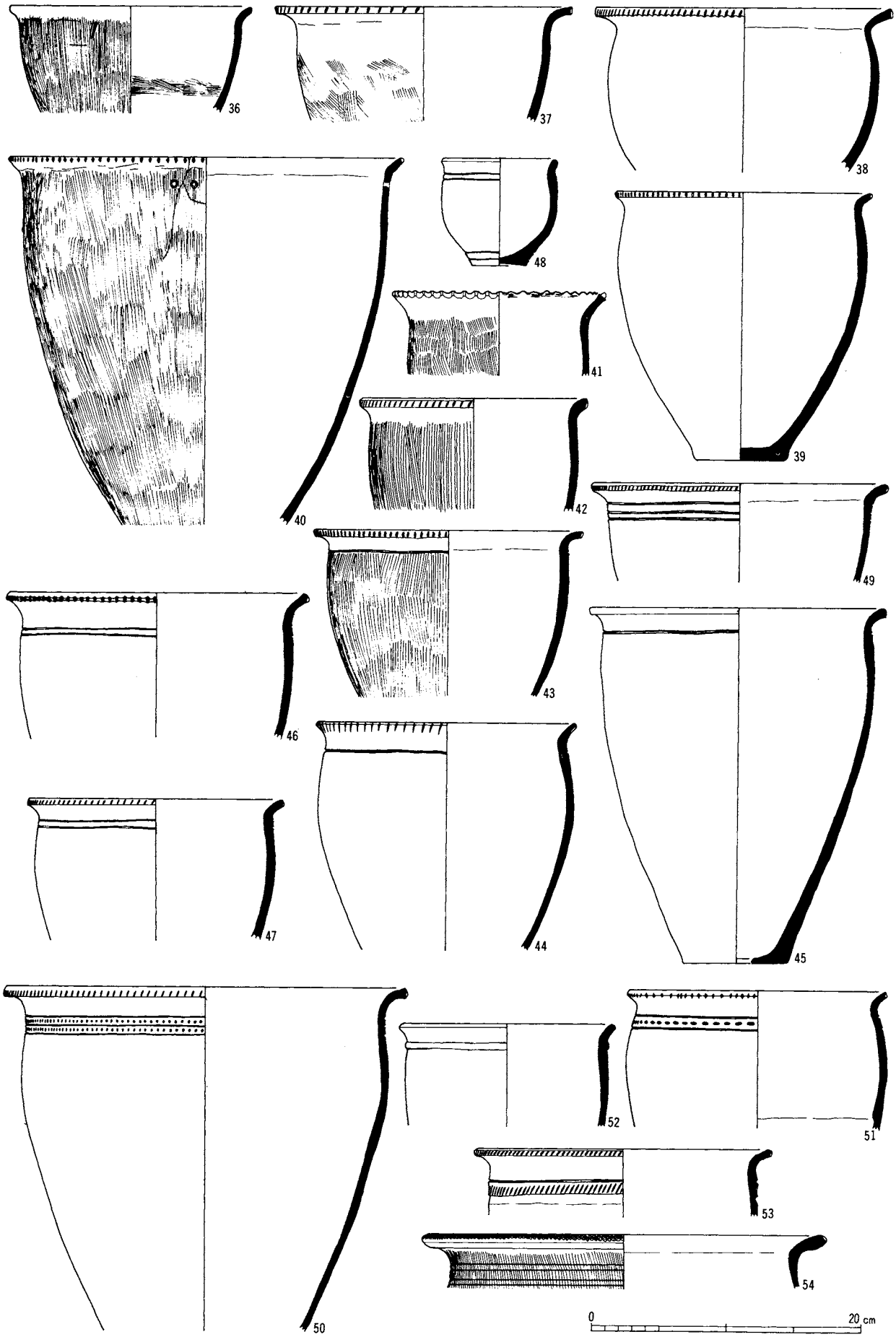
発掘区平面図（1/400）



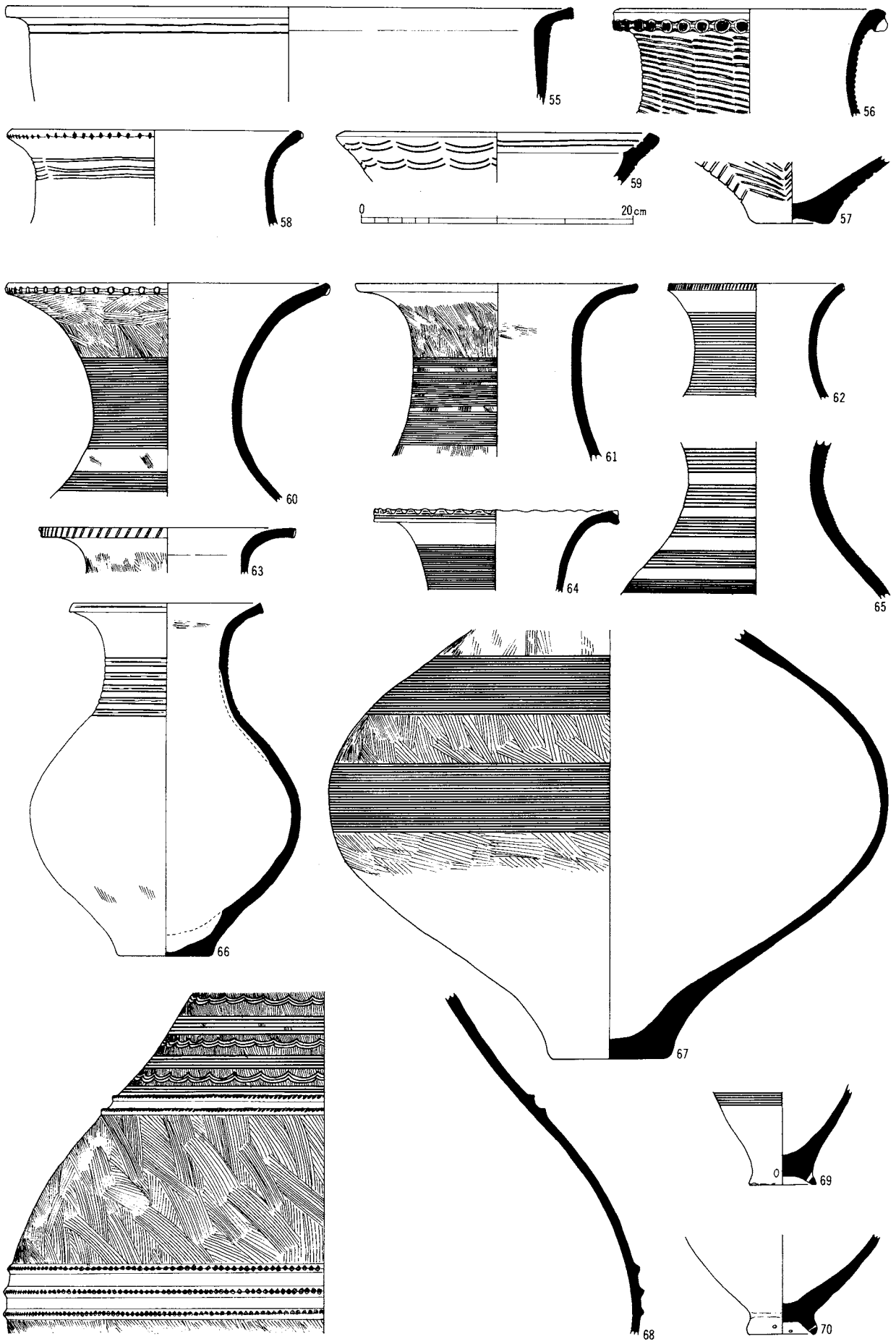
弥生時代前期土器実測図（1/4）



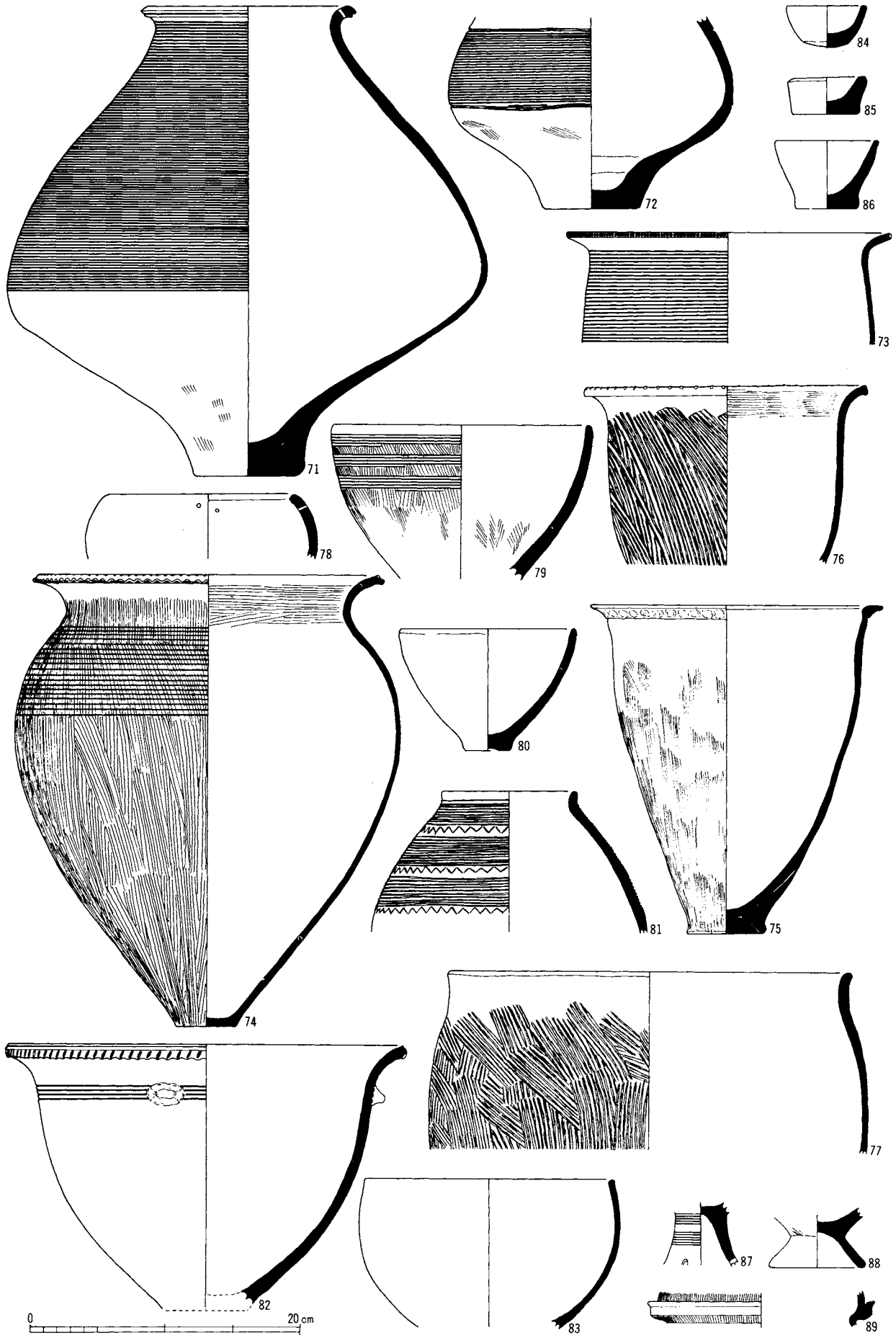
弥生時代前期土器実測図（1/4）



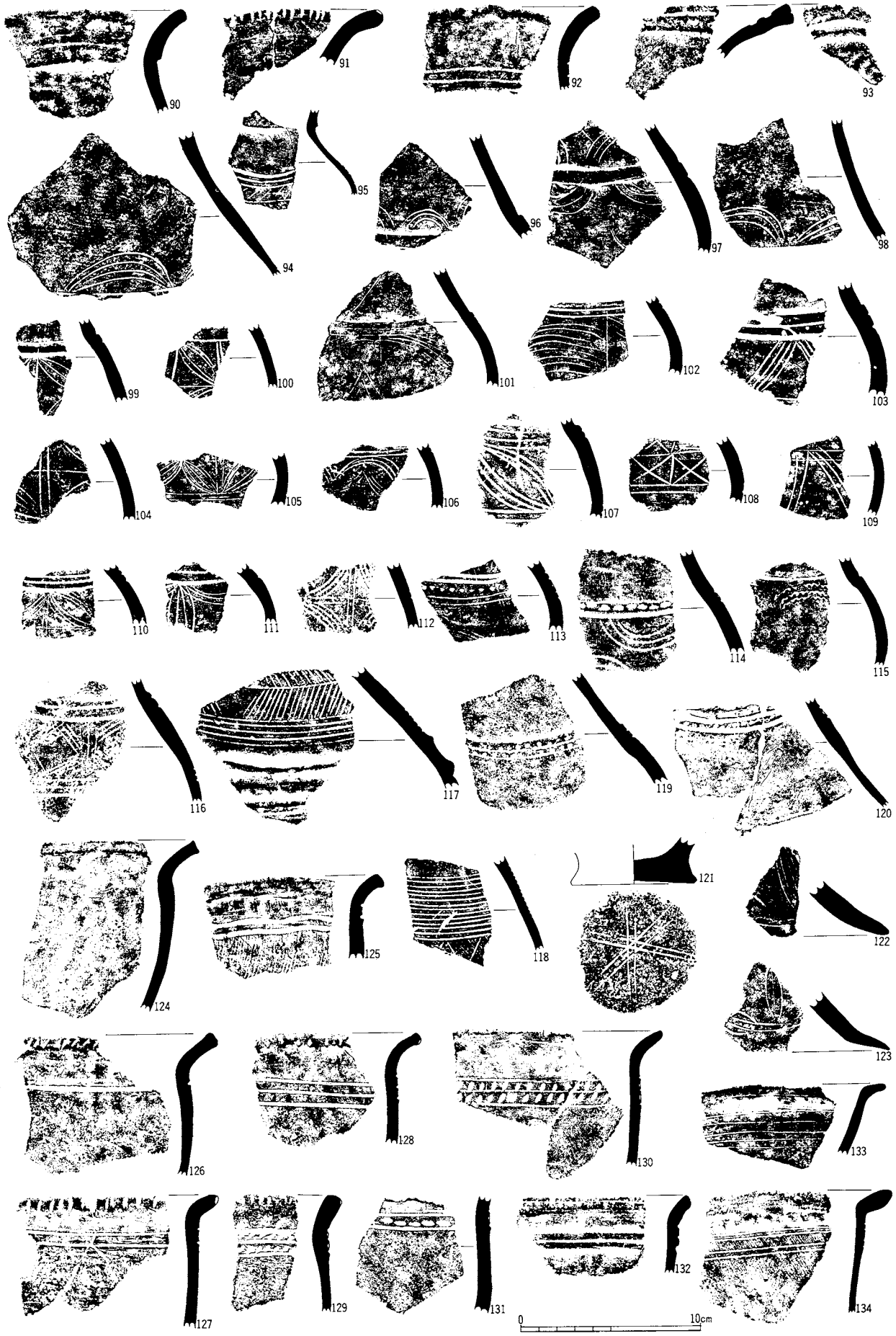
弥生時代前期土器実測図（1/4）



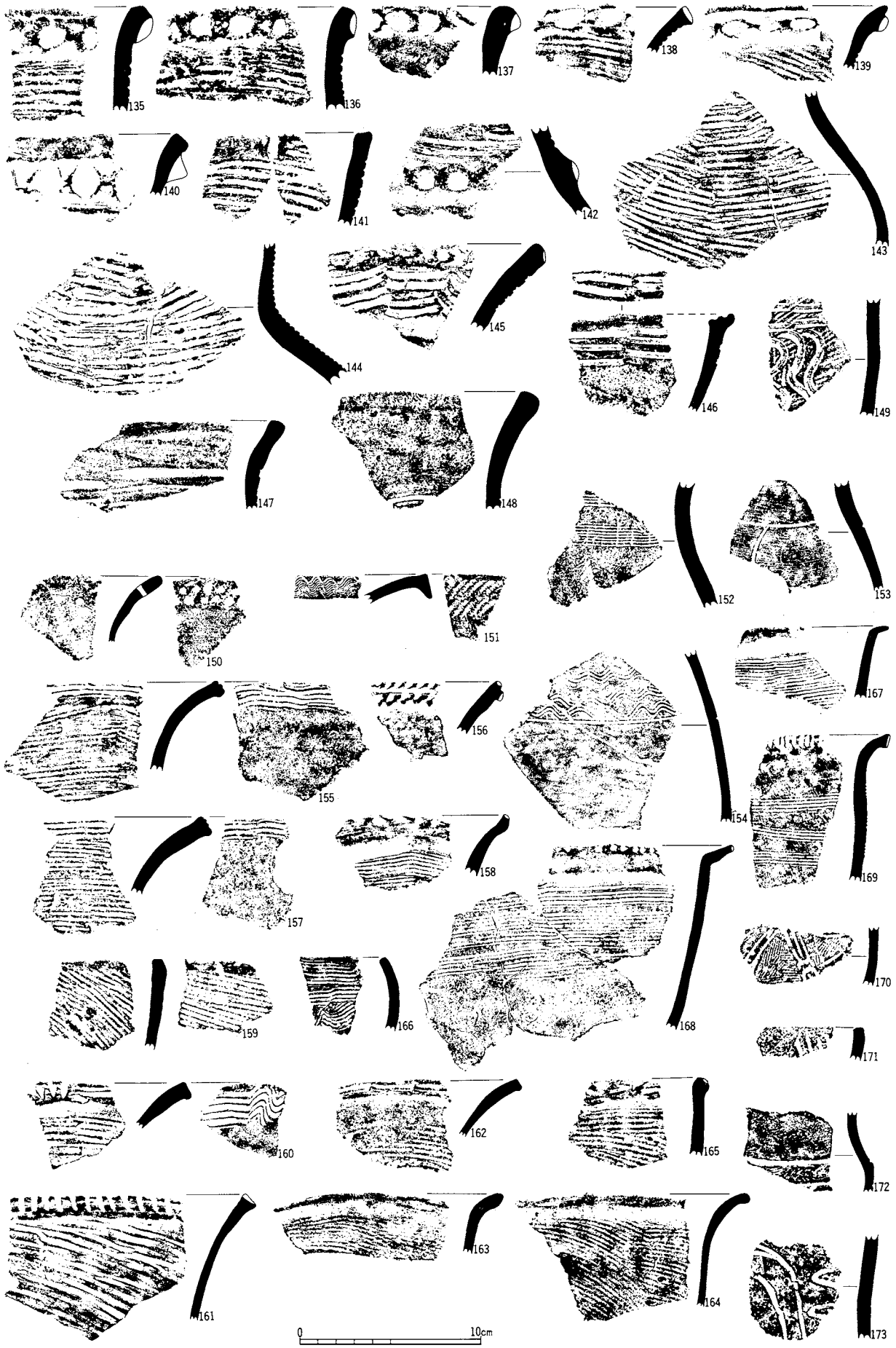
弥生時代前期（55～59）中期（60～70）土器実測図（1/4）



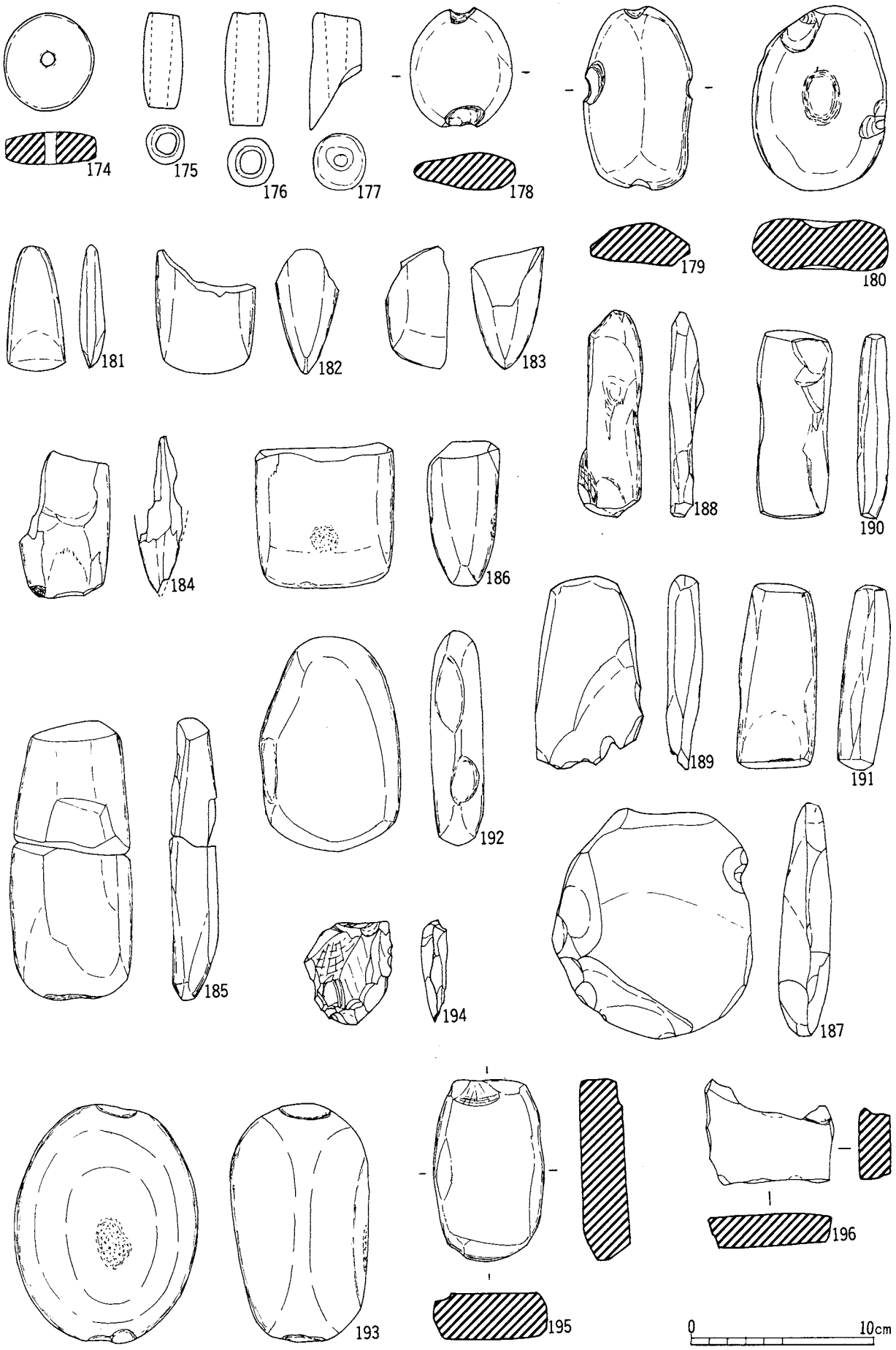
弥生時代中期（71～86）後期（87～89）土器実測図（1/4）



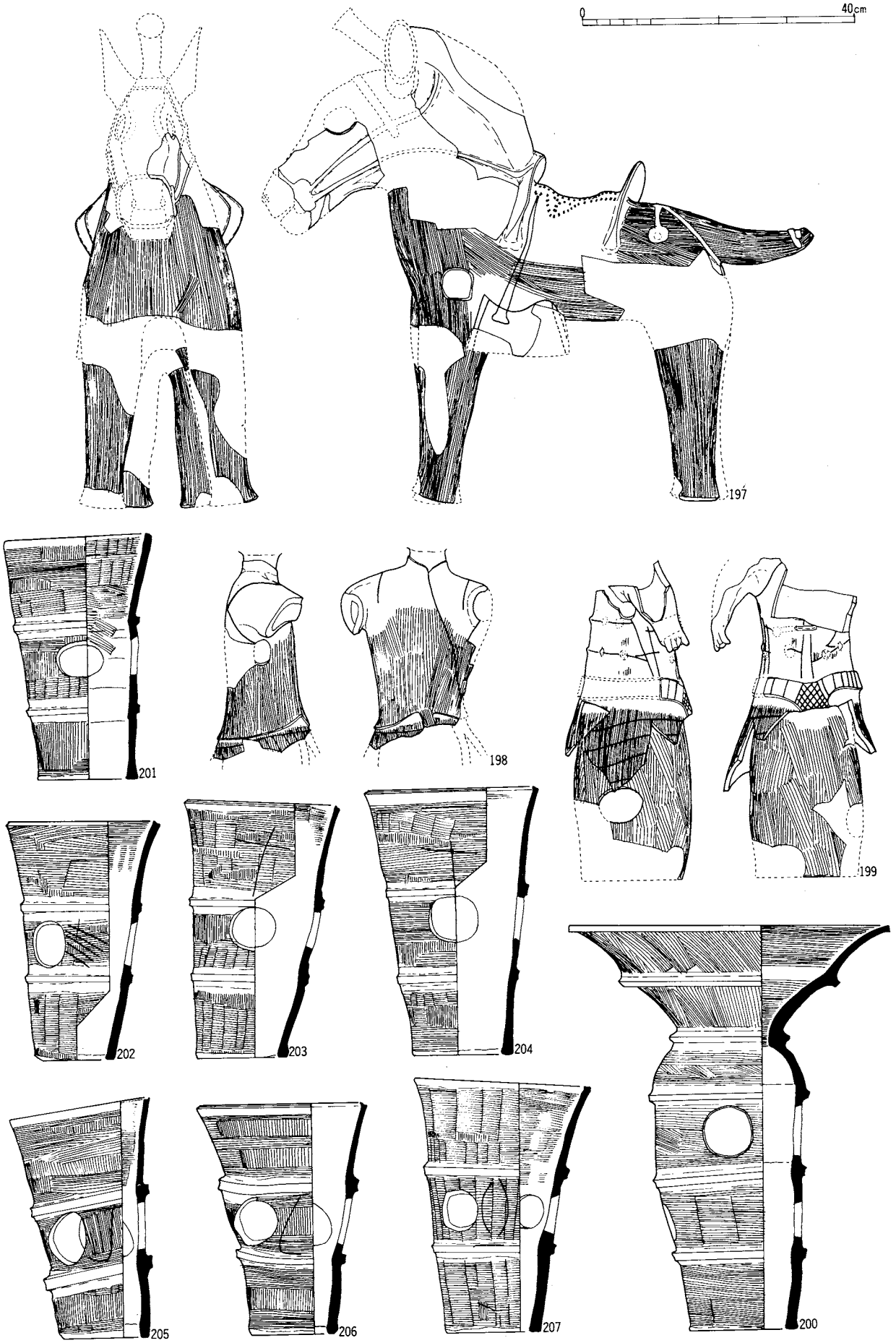
弥生時代前期土器拓影（1/3）



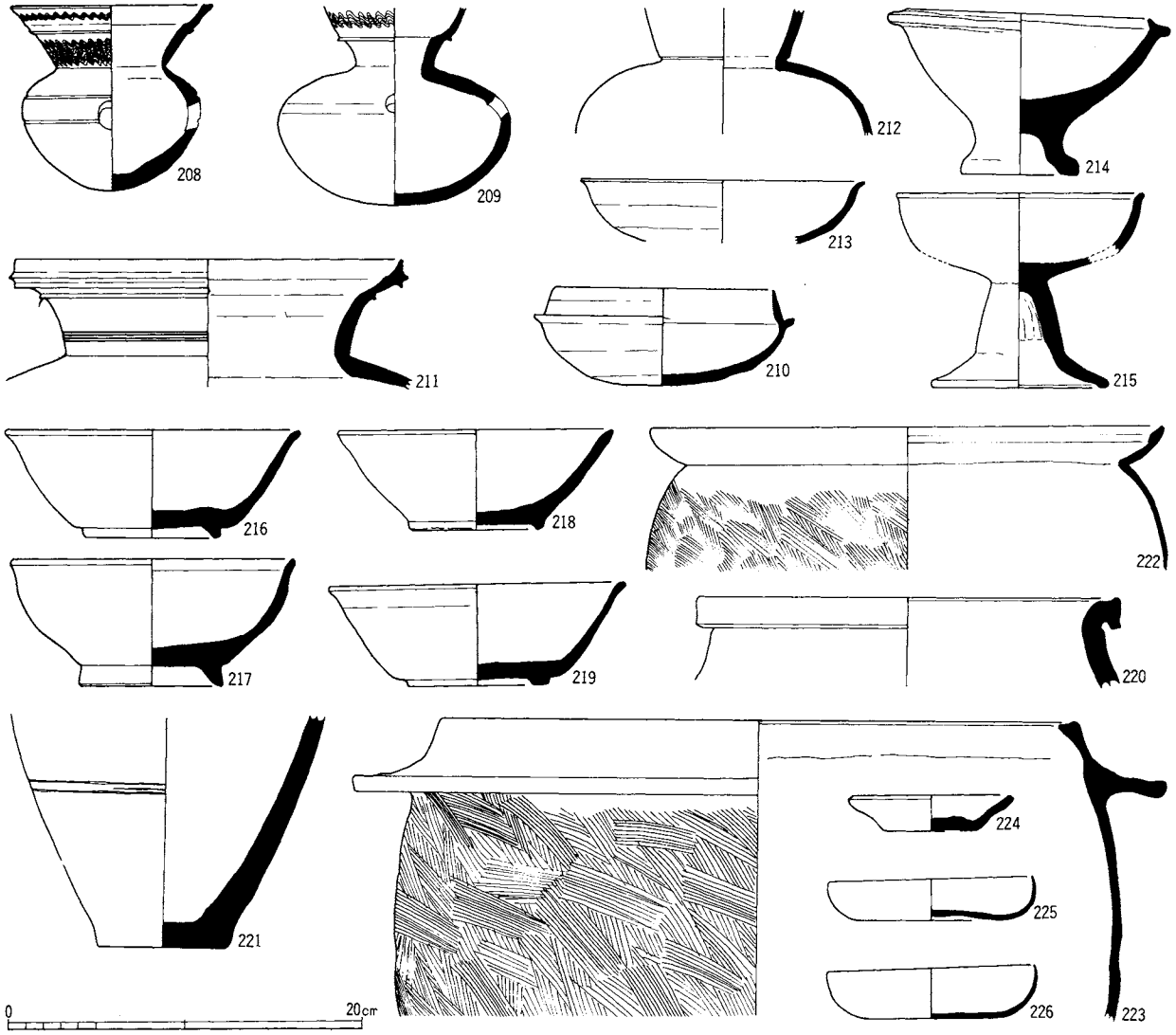
弥生時代前期・中期土器拓影（1/3）

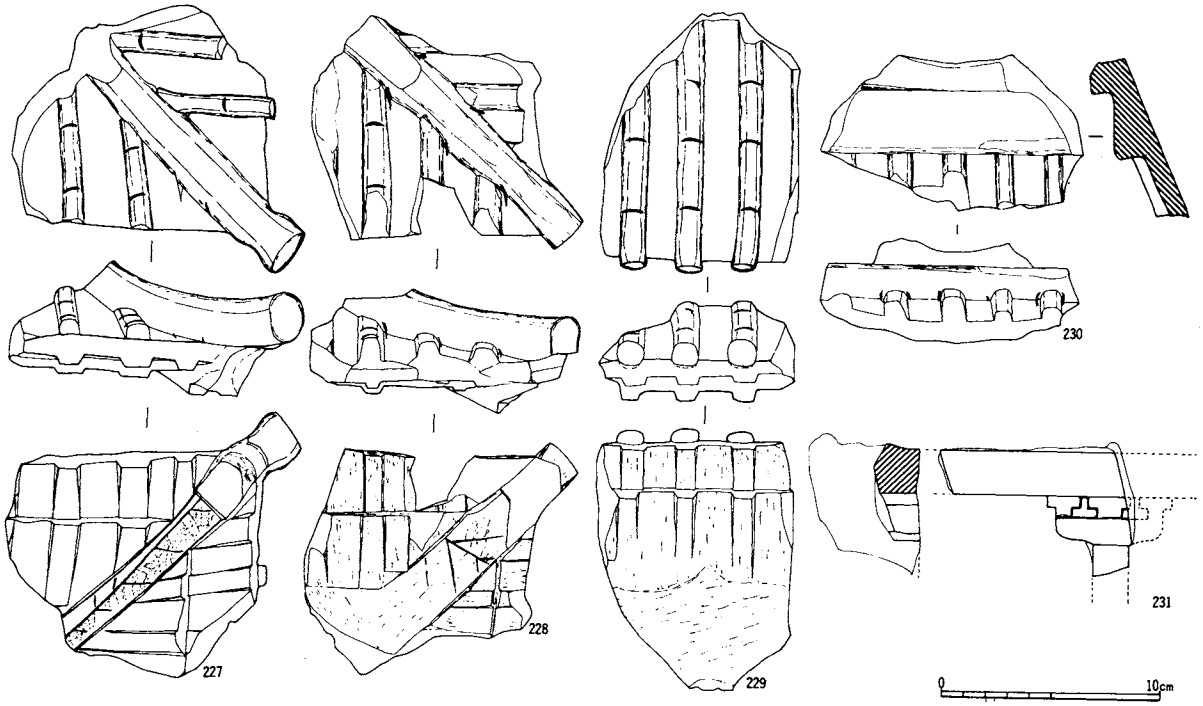


弥生時代土製品・石器実測図（1/3）



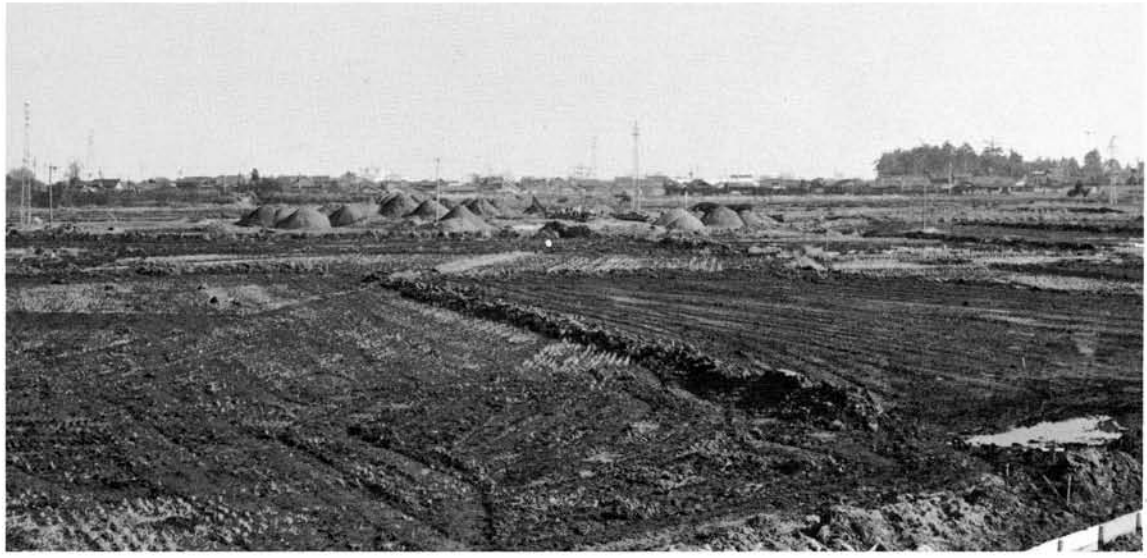
古墳時代埴輪実測図（1/8）



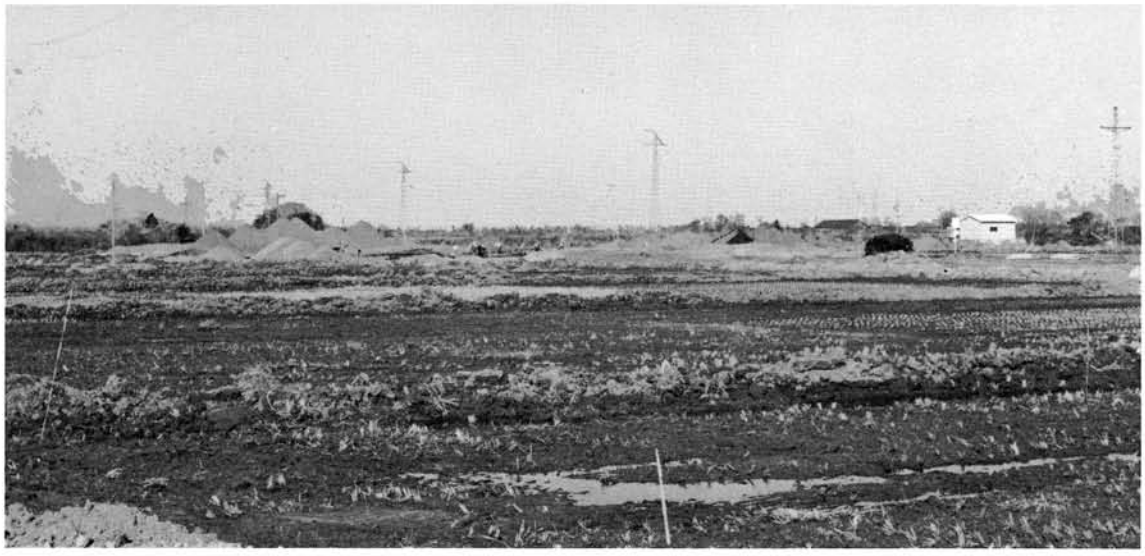


古墳時代(208～215) 歴史時代(216～226) 土器 (1／3), 瓦塔 (227～231)実測図 (1／4)

遺跡遠景（南上空より）



遺跡遠景（西より）



遺跡遠景（東より）

遺跡遠景（南より）

発掘区（北より）

発掘区（東より）

SD9・10・11（東より）

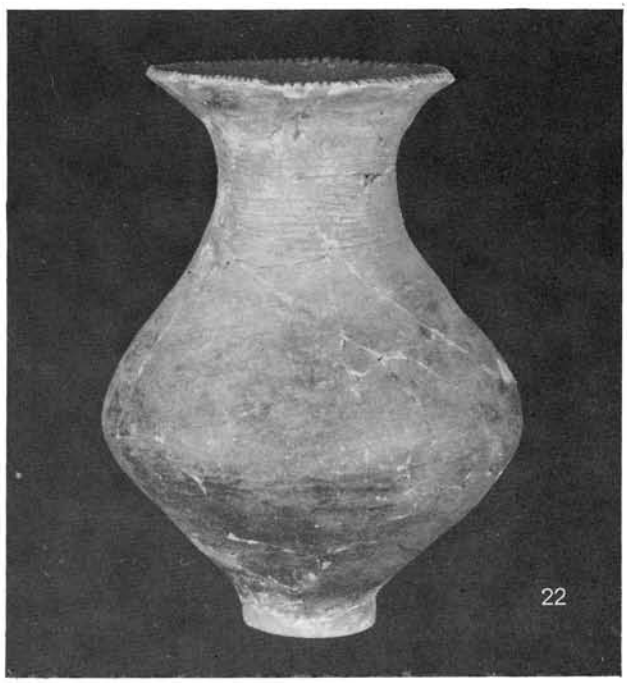
SD1（西より）

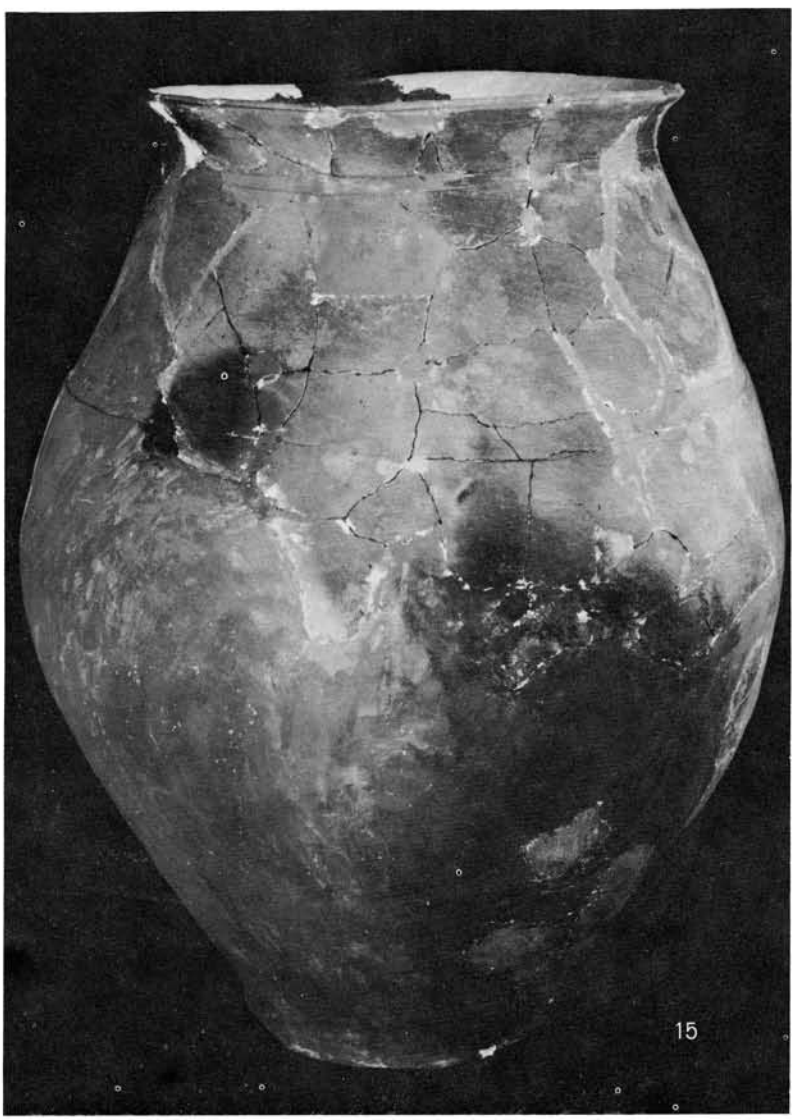
SD16

出土状態（71）

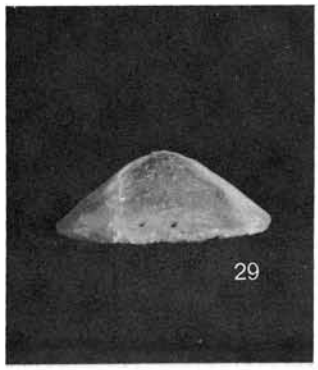
出土状態（11）

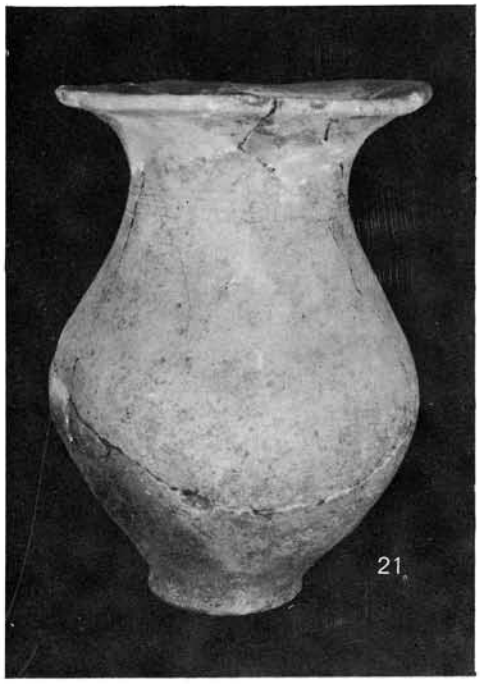
出土状態（200）

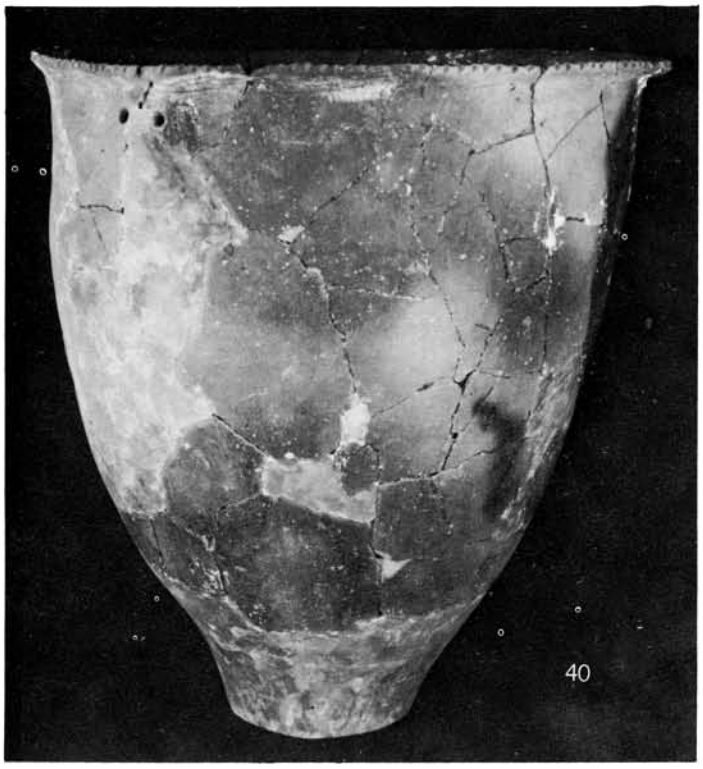


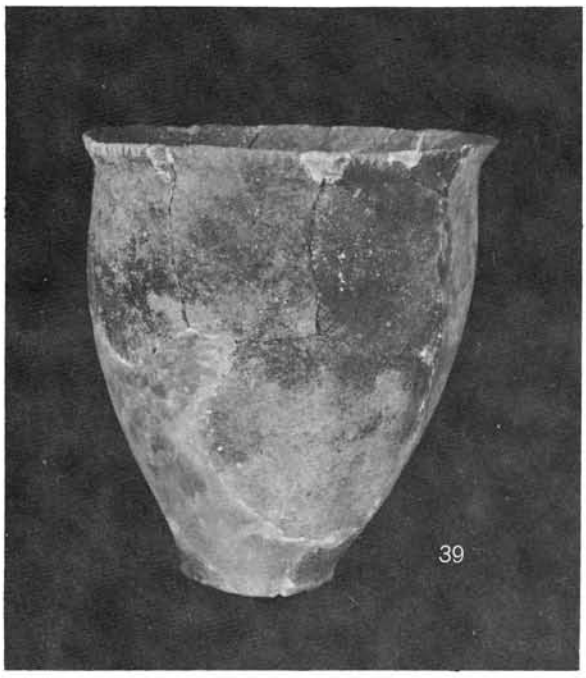


弥生時代前期土器（1/4）

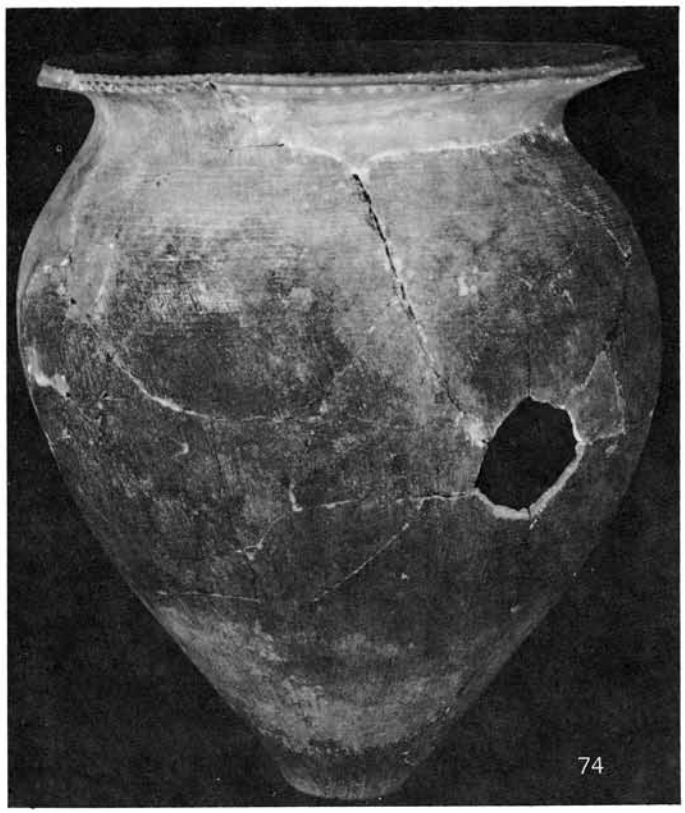


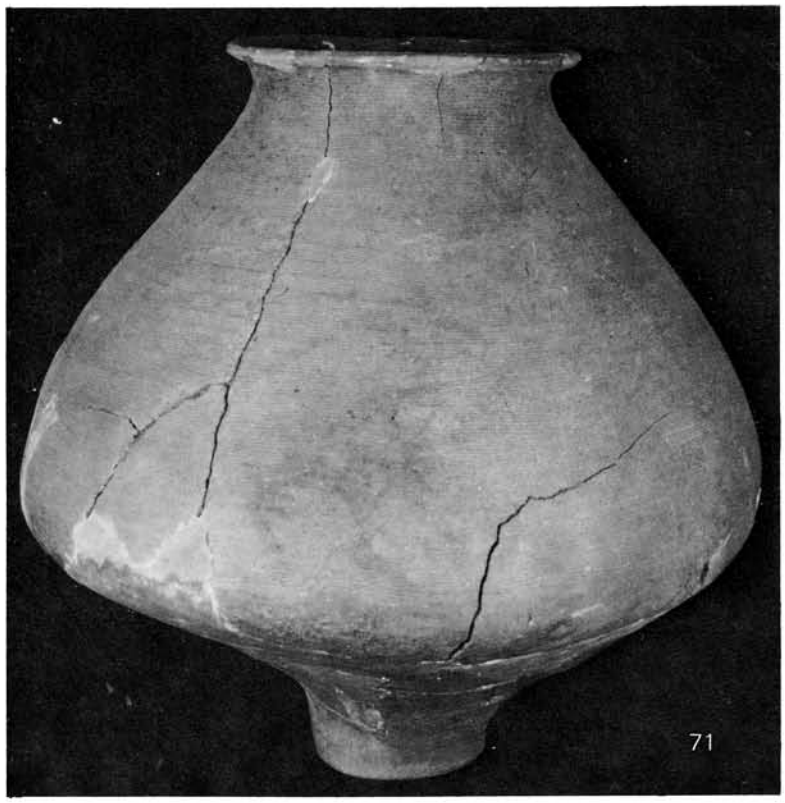


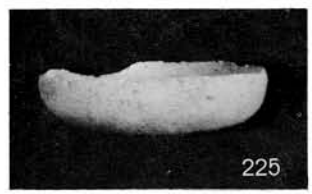




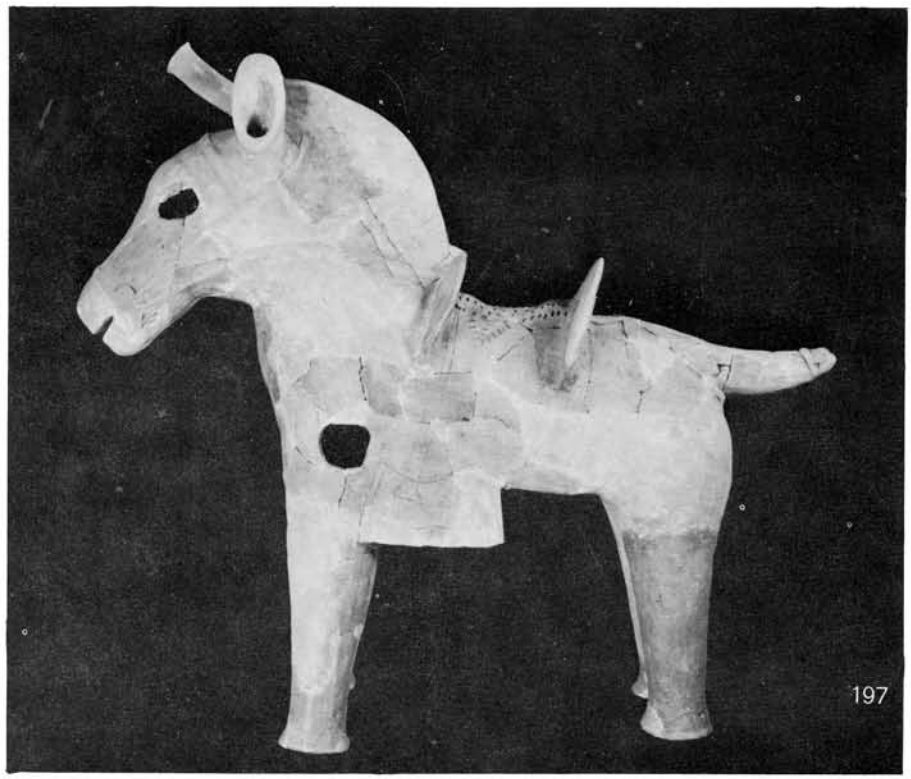
弥生時代前期土器（1/3.5）

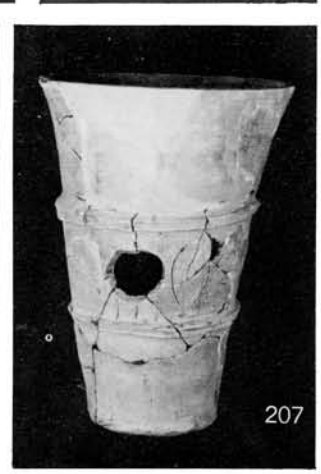




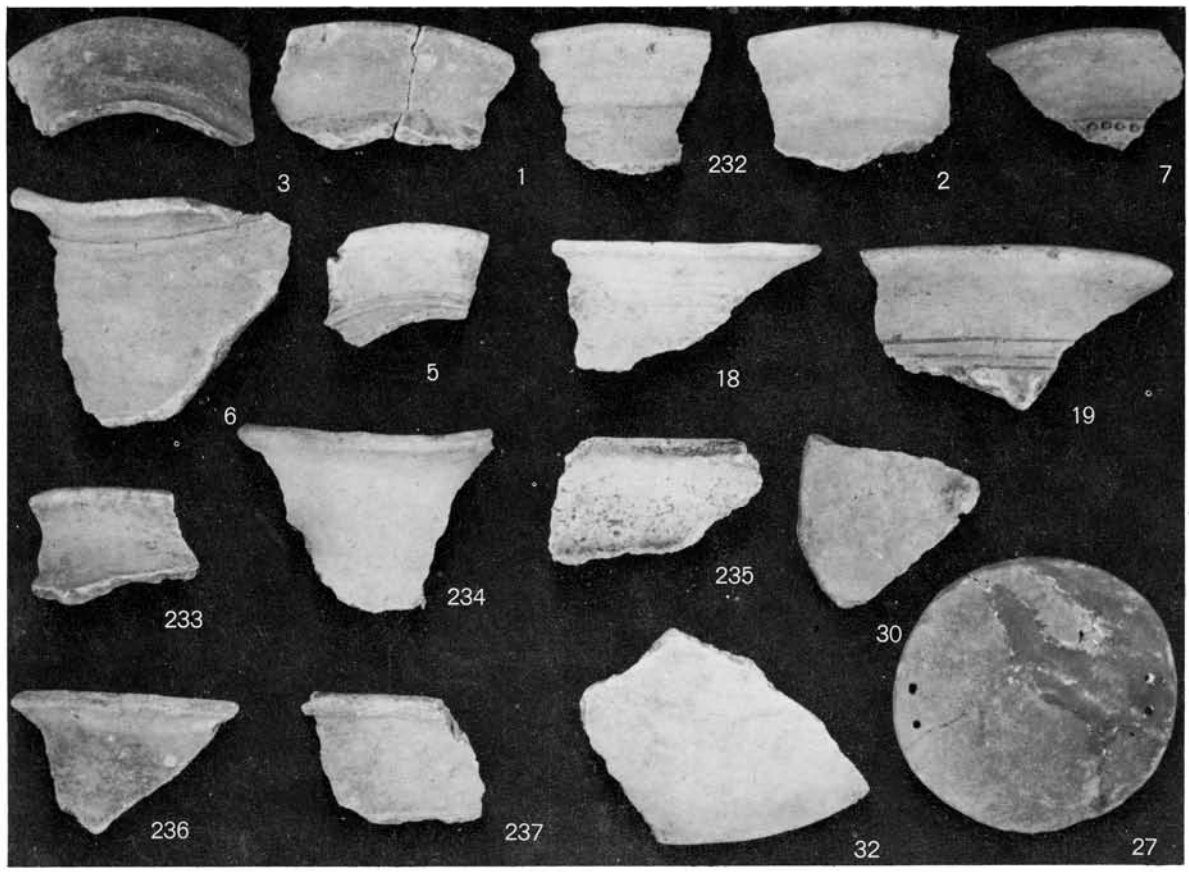


弥生時代中期(71. 74. 75. 85. 86) 古墳時代 (208. 209. 212) 歴史時代 (217. 219. 225. 226)土器 (1/3.5)

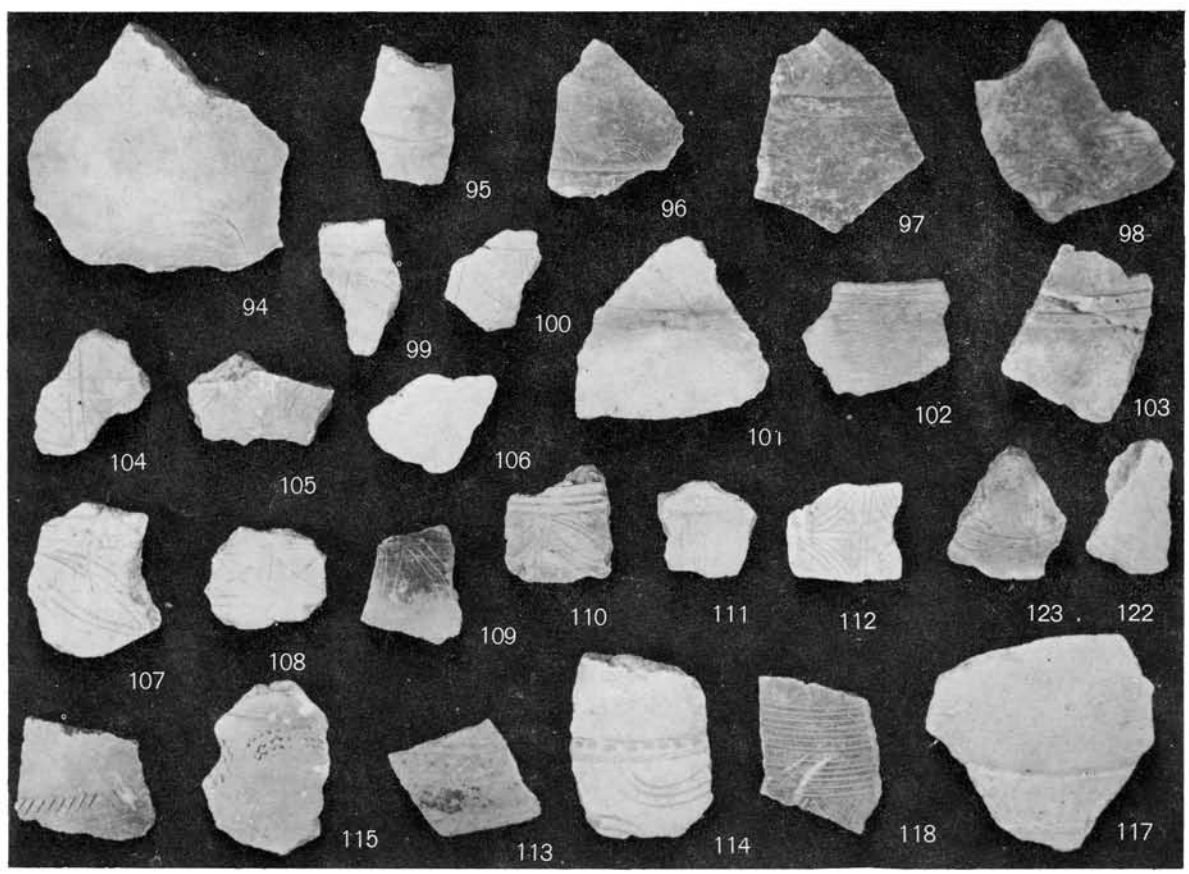




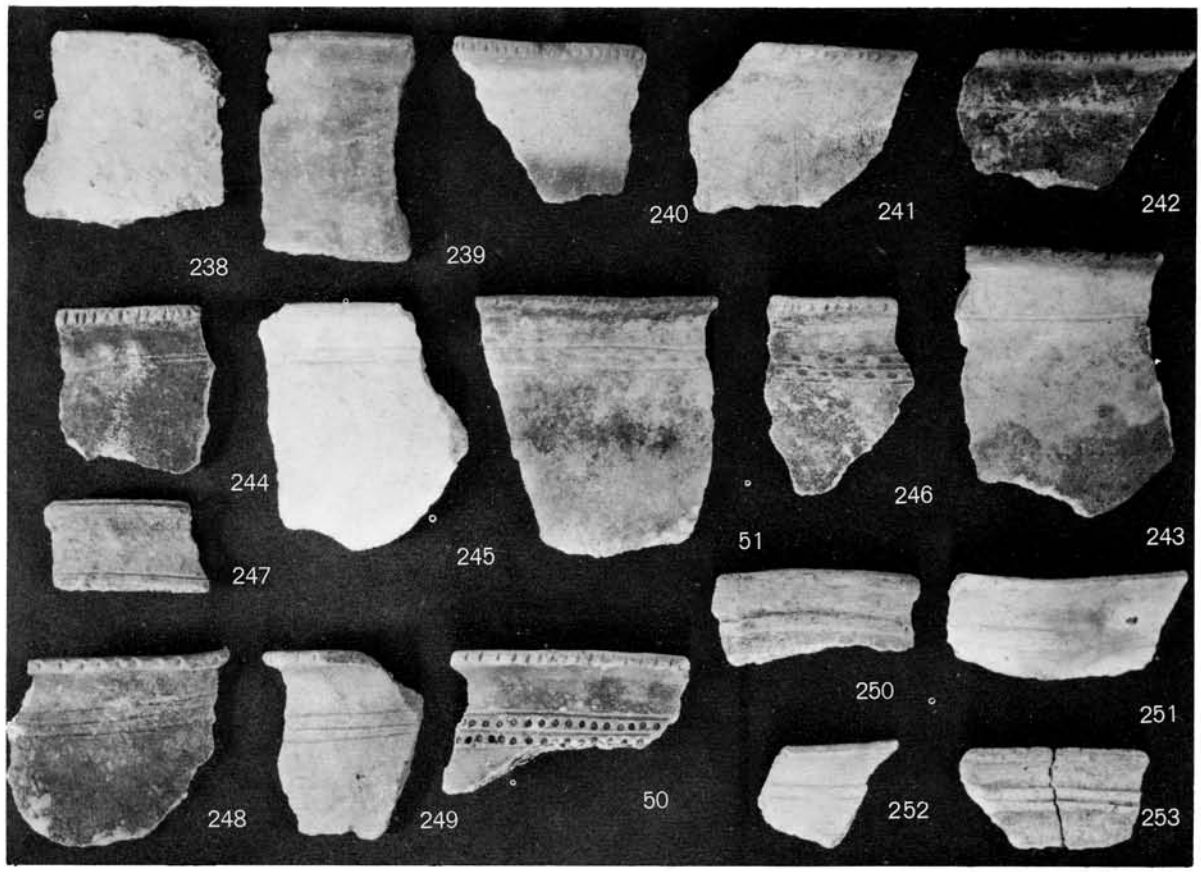
古墳時代馬・人物・朝顔・円筒埴輪（1/8）



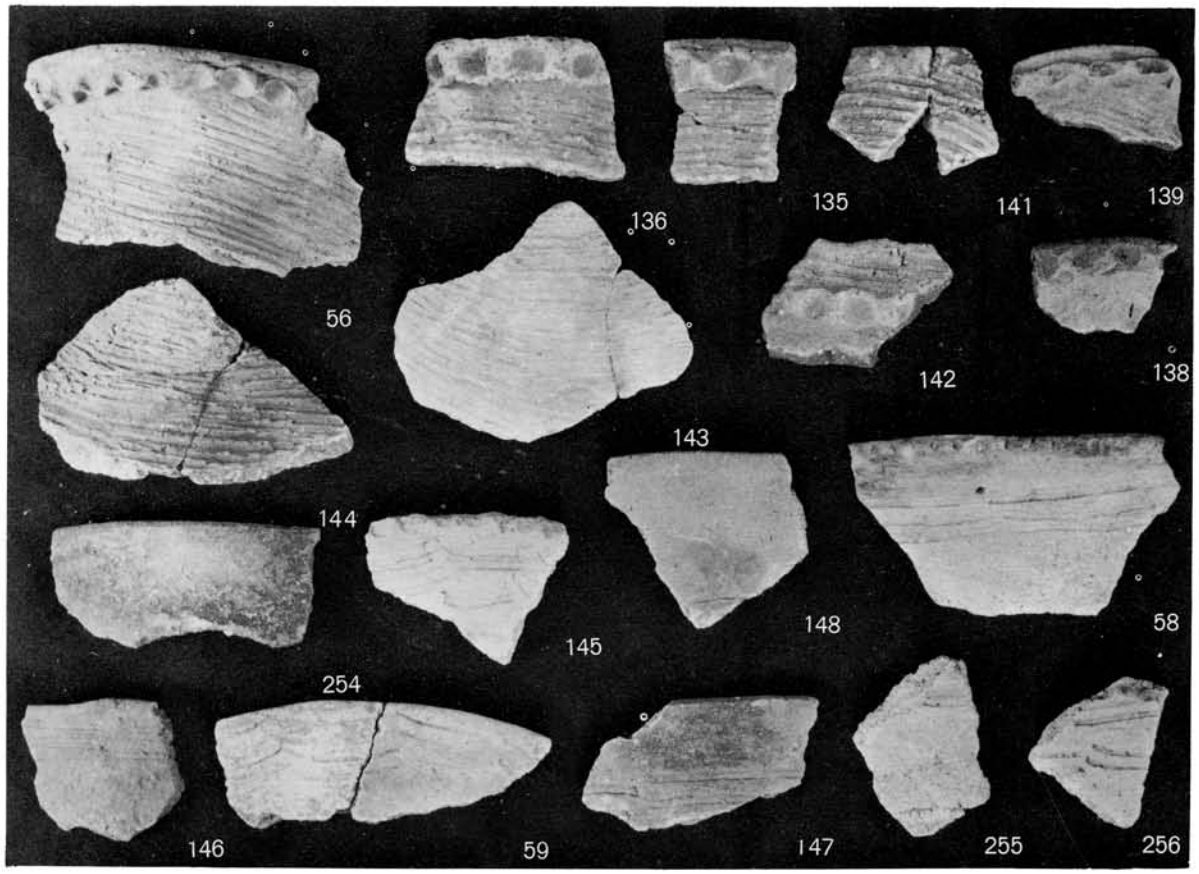
弥生時代前期土器（1/3）



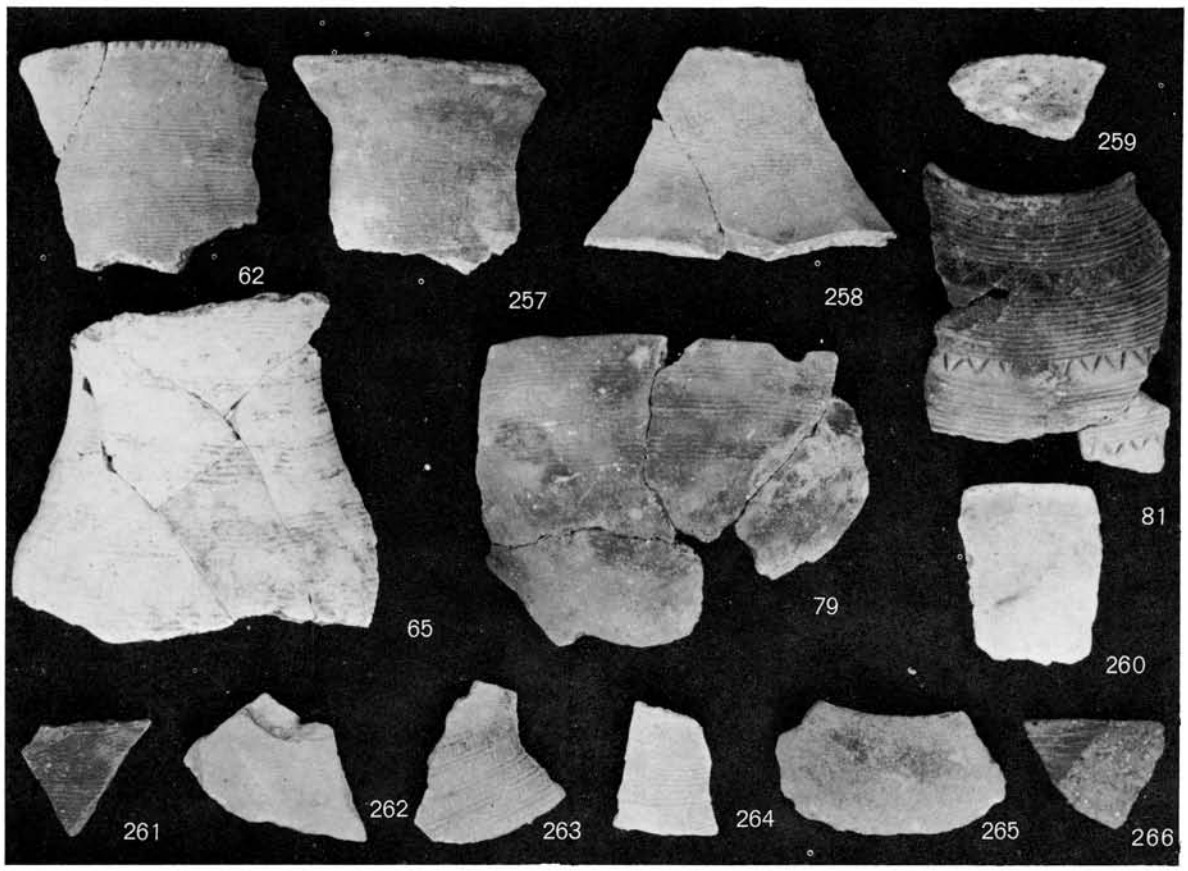
弥生時代前期土器（1/3）



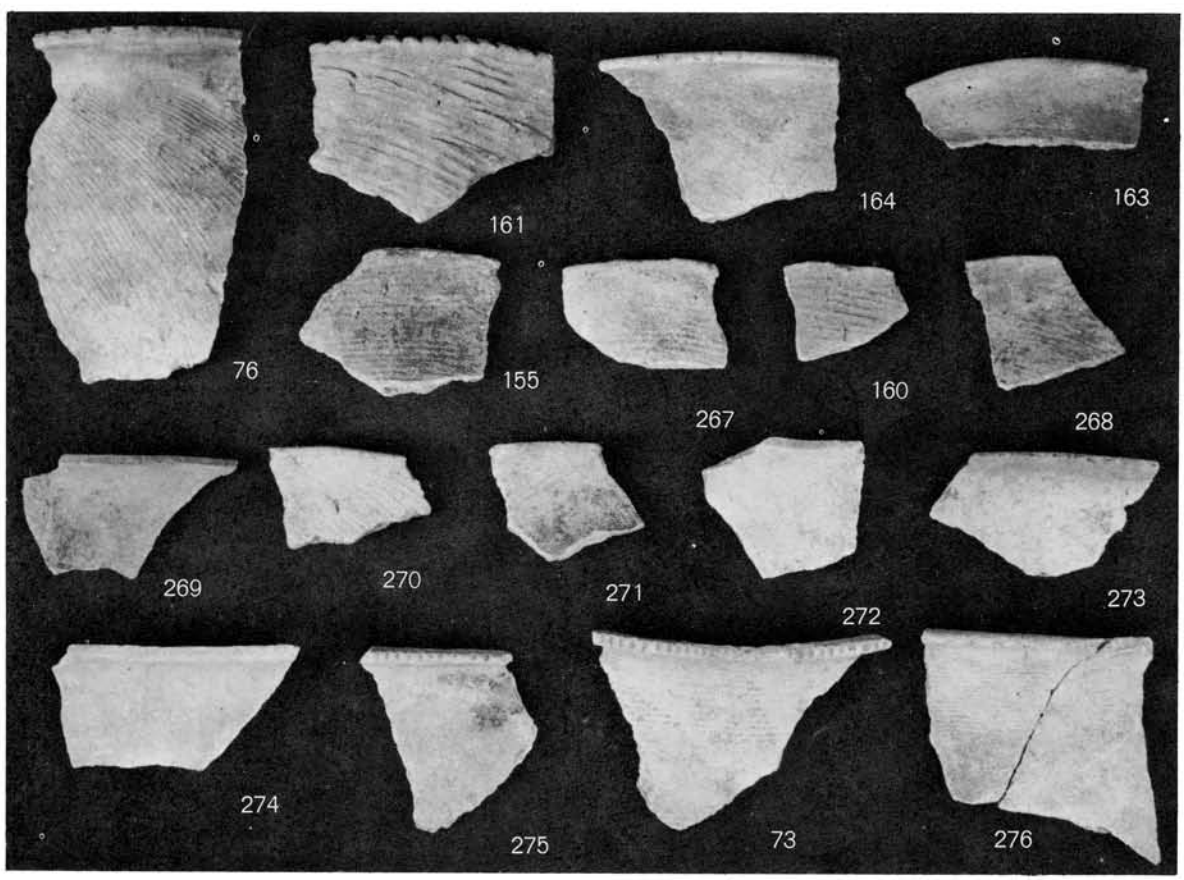
弥生時代前期土器（1/3）



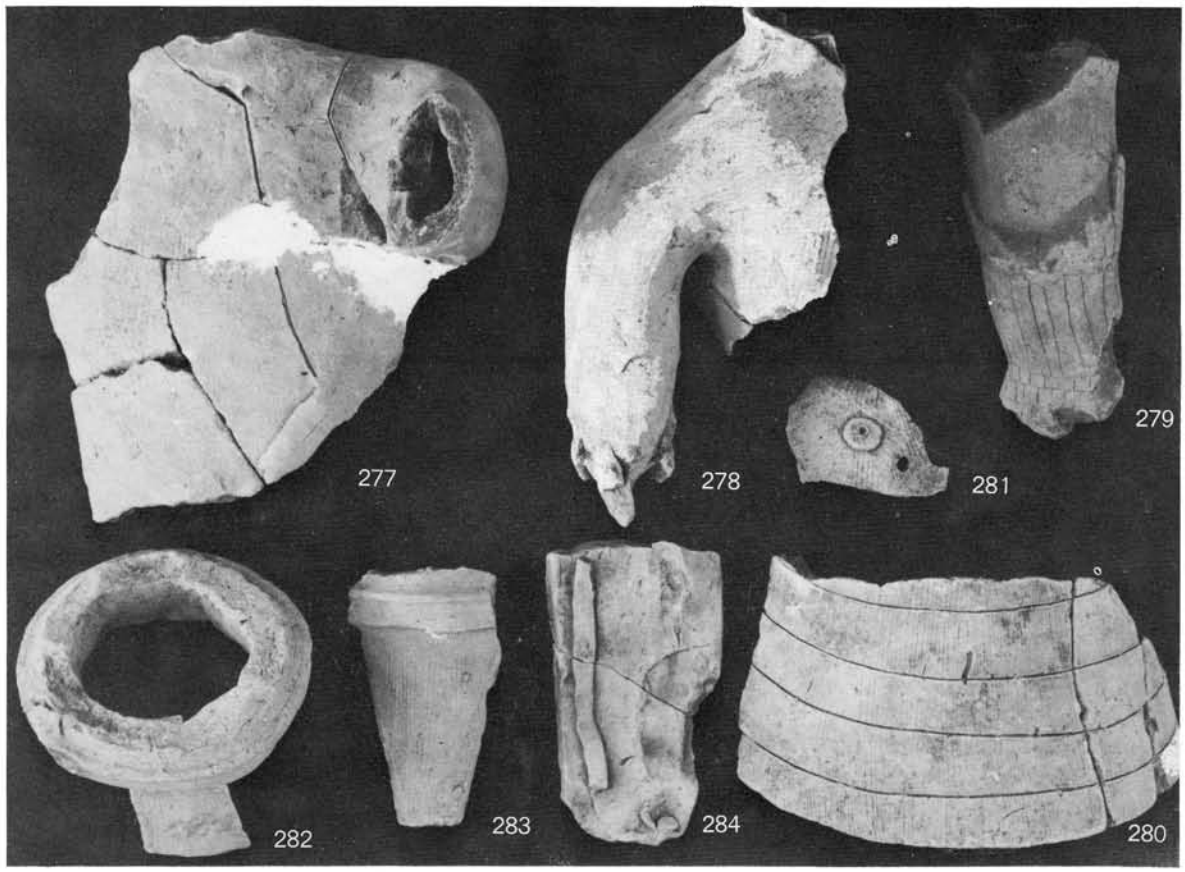
弥生時代前期土器（1/3）



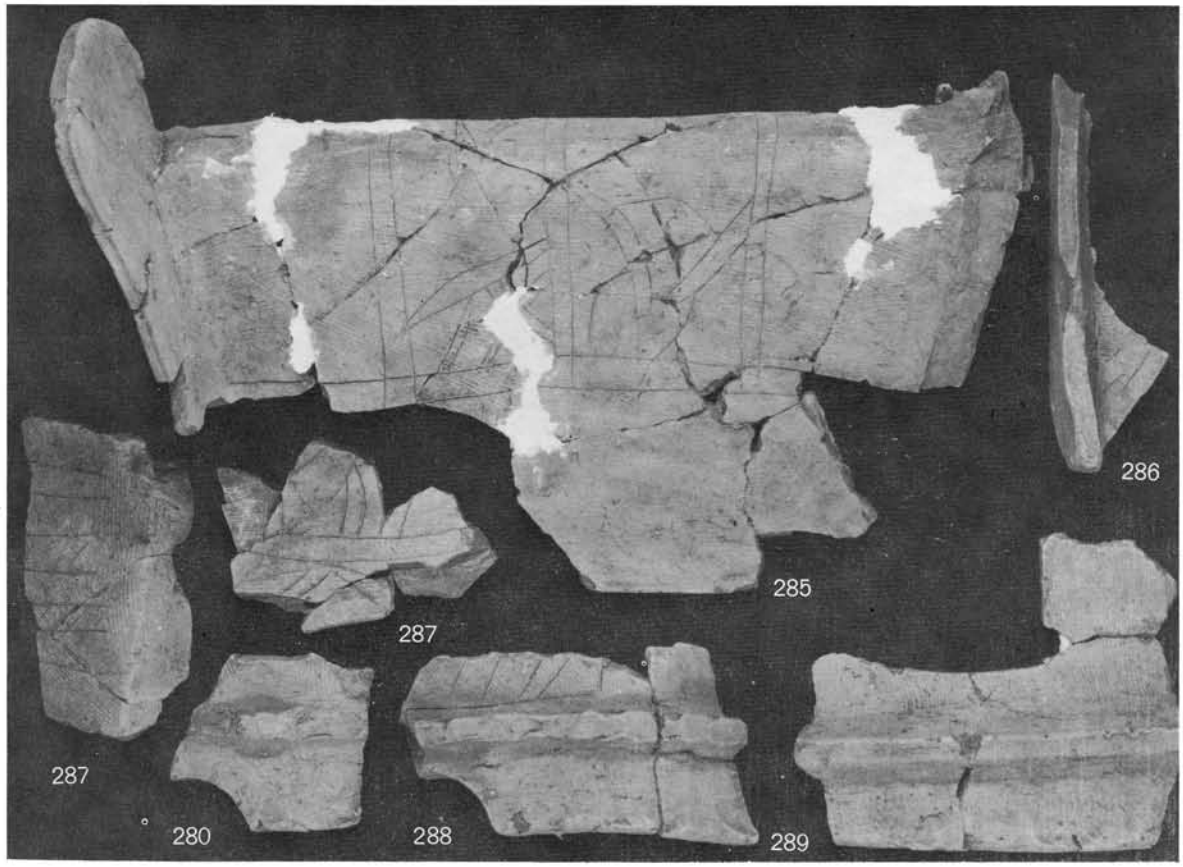
弥生時代中期土器（1/3）



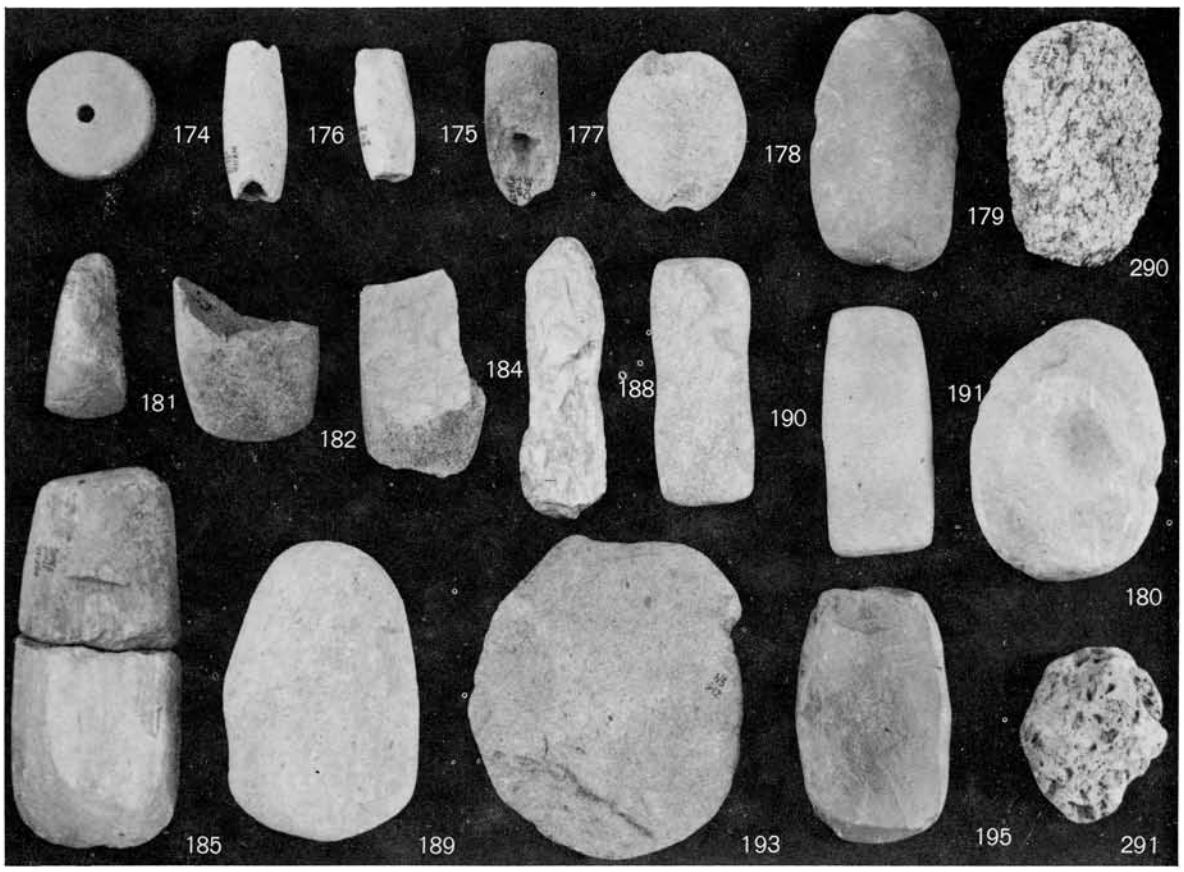
弥生時代中期土器（1/3）



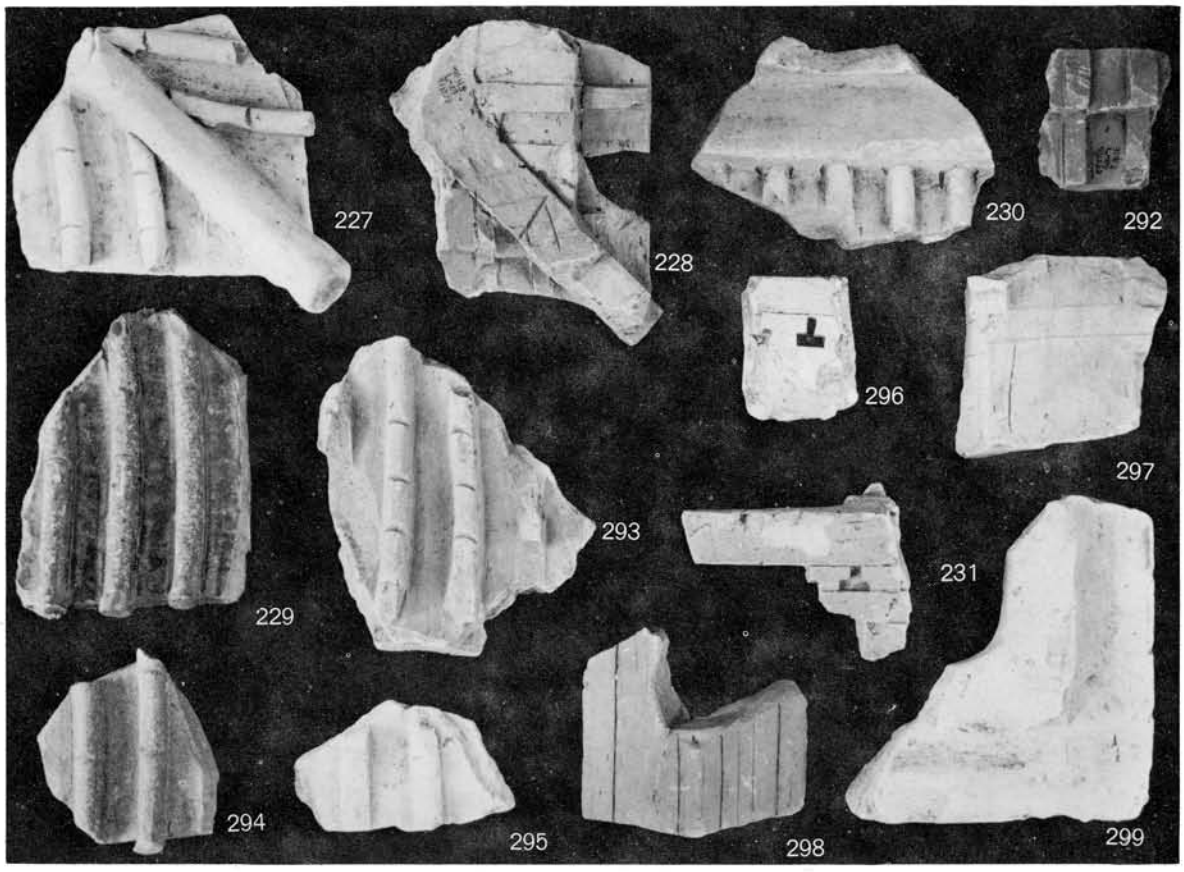
古墳時代人物埴輪　その他（1/3）



古墳時代家形埴輪（1/4）



弥生時代土製品・石器（1/3）



歴史時代瓦塔（1/3）

第　号
3332
三重県教育委員会
事務局文化課

三重県埋蔵文化財調査報告 10

中ノ庄遺跡発掘調査報告

1972年3月31日

編　集　三重県教育委員会

発　行　三重県教育委員会

印　刷　津市栄町二丁目
東亜印刷有限会社

昭和47（1972）年３月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年10月にデジタル化しました。